

サンカのことを注意して行きたしと思ふ。普通山窩と書くも當らぬ當て字なり。年中山野に漂泊して、定まつた村をもたぬ者なり。警察本部の小西刑事、大垣署長の廣瀬君、共に此問題に詳しいといふ。サンカには通路あるらしいこと、又其中にも種類あること。毎年一回地を定めて彼等の大集會あることなど、此二君に聽けば教へらるべしと思ふこと多し。ノヤといふ部落あり。サンカと同じく川魚を捕るを專業とする賤民なれども移住すること無し。長良川の岸にも、又三條野の大池の畔にも住み、後者はやゝ大なる部落なりといふ。ノヤは野間かと思はる。池番として定住を許さるゝか。番太なども普通に漁業は上手なり。

岐阜市の盲人は今も正五九月の巳の日に集り、めくらの手引神なりとて辨天さまを祀る。祭式にはさしたる特徴無し。

割山と稱して山野の使用權あり。之を隣村民にも賣ることが出来る舊慣、何とかして詳しくしきことを知りたしと願ふも、さういふ話をする人に逢はず。

七月八日、土よう

母の忌日なり。電車にて關の町へ行き、町を見てあるく。それから上有知へ、今は美濃町と謂ふ。同業組合の製紙試験場に行き、又水力電氣の發電所を見る。この邊皇室の御漁場なり。長良川の水うつくし。

郡上の八幡へ人力車。備前屋に泊る。旅店にして料理屋を兼ねるもの。夜郡長竹内氏、又御料の小川技手來り、色々の事を教へてくれる。

けふの路の左右、藁屋の棟長くして中低なること支那の家如し。瓦葺きにも此形少しあり。藁屋の破風を、別に藁にて塞げるものあり。吹雪の多い處なればにや。

郡上郡にての楮産地は、長良川と津保川の谷なりき。今も路傍に少々の痕跡を見るも、大體に於て桑に壓迫せられた姿あり。桑の木の皮は製紙用にはならぬかどうか。其試験もして居ると同行の江崎技師言ふ。

この郡、山林は舊藩時代より甚だ振はず。農作にも使はねばならぬ爲なるべし。養蠶は

今中々盛なり。生糸の年産七十萬圓に及ぶといふ。手引がまだ行はるゝものと見ゆ。稗はすべて畑稗、この地方では朝鮮稗といふ。加賀などで鴨足と呼ぶものと同種なり、味はよからず。成熟期も不同、白山の北側にはこの物多し。

サンカは又オゲとも呼ばれる。郡上邊には夏のみ來り、冬は温き方に行くかと思はる。伊勢では冬は熊野の方へまはると言はれ、此者の通路は定まつて居るやうなり。さくらや籠、又箒などを作つて賣りに來る。岐阜では石龜を袋に入れて賣りあるく者あり。海津邊にて、多度の祭の日喧嘩をした爲に訊問せしことあるオゲ、後に岐阜にて贓物故賣にて所刑せられしことありと竹内氏言ふ。又石川縣にてオゲの貞女あり。夫の死したるとき村民憐みてよく之をいたはる。其折に見たるに、其小屋には小さき厨子様の物ありて、其中に先祖の位牌を納めて居たり。平人とさして異なる生活には非ざるか。はた此オゲのみが、特に彼等の中に入込んで居たものか。

木地屋の生活も、まだ此地方でならば尋ね得べし。武儀郡下牧村大字片知は三百戸ほ

ど、多くは苗字小椋せうくらなり。木地屋の土着と見ゆ。郡上郡西川村の内ヶ谷にも小椋氏ありき。是は他處より移住せし木地屋にて今は死に絶えたり。岐阜市にも同じ苗字の家あり。江崎君曰く、木地屋の中には容貌の立派なる男女多しと。この事又斐太後風土記の記事にも見ゆ。木下氏又いふ。前に三重縣飯南郡の警察署に在りしとき、管内のたしか森村大字猿山にて、崖崩れて川の中に、蓆包みの死體現はれしことあり。双物がその亡骸と共に包みてありしより、乃ち木地屋なることを知れり。木地屋の双物は双の付け方普通のもとは逆にて、左から磨ぎ手前へ引いて削るやうになつて居ることを知る者ありて、一見して是は木地屋だと言へり。彼等には木棺を用ゐざる葬法有りと見えたり云々。

飛驒にはテテと稱する特殊民あり。古河町の是重に三四戸、小鷹利村こたかり上野かみのに二戸、其他にもなほ多かるべし。上野の二戸のうち、一戸は醫なり。つまらぬ醫者なれど、藥がよくきくと評判せらる。是重のうち一戸は金持なり。平人窃かにその金を借る者あり。娘に千圓附けて遣りたしといへど、テテなるが故にもらひ手無し。何故にかゝる差別觀あるや知

ること能はず。犬を先祖とすといふが如き荒唐の説あれども、何人も是を實なりとはせず。ただ以前は履物を許されざりき。

所謂ゴンボダネはテチとは關係が無いやう也。ゴンボ種の方は部落に非ず。部落に混入せる少數の家筋なり。もと上寶村かみたからより出づといへど、今は各處に散在す。人に憑くと稱せらる。どうしてそれが知れるかといふに、必ずその憑かれた病人の口からにて、病人は其家の事をよく知りて語り、又之を驅逐すると、足立たぬ病人が此時のみは走りて、其家に行きて倒れる也。よく弱りたる病人ならば、憑いた本人を呼んで來て撫で摩らしむ。本人は勿論迷惑して之を拒めども、何としても病家の者が承知せずといふ。

是も竹内氏の話。伊勢と大和の境の高見山の頂上に社あり。東麓には入鹿の墓なりといふ大なる塚あり。この山の南を通る峠の中腹に茶屋あり。人之をオニギと謂ふも、其實は御禰宜にて、此塚と社の社掌なりといふ。本家は和の方の麓村杉谷に在りて、オニギの家には文書無し。毎年八月十五日を入鹿の日なりとし、夜分この山に參る者多し。

郡上郡某寺の寶物に鬼の鬚あり、角と牙とはこしらへ物らしけれど、とにかくに奇なことは、鬼の頭骨は後頭部が著しく長く突出せり。

七月九日、日よう

二宮江崎の二君郡書記を加へて一行四人、長良川の左岸を白鳥しらとりに向ふ、よき路なり。白鳥駐在の青木巡査部長も來り加はる。途中大島にて縣種畜場を見學す。この邊高原廣く連れり。

白鳥に早く著き、井増屋に宿をきめてから町の内外を見てあるく。役場より村圖を借りて見る。白鳥は上之保村に屬す。油坂峠の口なれば町つくりであり。よく火事のある宿しゆくなりといふ。越前穴馬より峠を越えて、賣買ひに出て來る市なれば、山中の市場の特色をよく具へて居る。現在は福井縣内の交通改良せられ、穴馬よりはあまり出て來なくなれり。福井の方も縣道なれども、面谷おもたにと油坂の頂上との間だけは少しも補修せず、極めて悪しき路なりといふ。面谷から大野へは九里、此間は中々良い道なり。

けふの途中での見聞二三。八幡の馬市は土用に立つ。當才の毛附なり。此邊古くからの産馬地と見えて、例の磨墨すゑの傳説爰にもあり。牛道村大字那留なる、ナルガ野といふは山中の平野なり。石鈴と稱して振れば鳴る音する石あり。是をナル石といふは偶合なるべし。ナルは中國四國の廣い地域にかけて、斯ういふ山間の平地を意味する普通名詞なり。奈良も同じ。この那留ヶ野の奥には、又ソロバン石といふを産す。是は玉髓といふものなりと謂へり。

郡上郡は人口六萬、三萬五千石の米を産す。稗は一萬石といふ。茶の實こぼれて多く野生す。茶には肥料を施すことなし。屋根の萱葺き用の爲に萱の種を播くことあり。斯様に土地の利用法は進みてあれど、植樹の知識のみは、この山間の勞働者はまだ持つて居らざといふ。

上之保村では山梨の皮を剥ぎて販ぐ者あり。又小梨の木も皮を採る。販路は江州の方なりといふ。梨子地の材料とすといふ説あれど信じ難し。

ホヤ即ち寄生木やとりきにて兔を捕る獵法ありといへり。詳しく尋ねず。又山に住む犬あることを聞く。

飛驒との交通も多く、その風俗や入つて來て居る。飛驒系統の股引もひきは、カルサンの小さくなり又衣の下になりしものなること、實物によつてよくわかる。

夜分小學校長も話に來てくれて、色々の事を聞く。月明かに四方の山は低し。

石徹白いしとしろは爰でもイトシロといふ風に發音せり。その石徹白の冬の出稼ぎは郡上あたりへも來る。以前は若い者が家に残り、年より子供のみが出て來るので、自然物もらひの形になりしことは、牛首も五箇山も同じきが如し。どうしてさうなつたかは誠に考へて見るべき現象なり。飛驒も古くから石徹白と關係深し。大野郡よりこの越前の山村に入るに、一旦白鳥まで出て來て、檜峠を越ゆる者今でも多し。是は白山の主要登路の一つにて、即ち又明日我々の向はんとする道なり。

江崎君云ふ。岐阜では今泉宇本郷といふ邊に、常にサンカの群居する處あり。警官之を

追拂ふといへども、久しからずして又歸つて來るといふ。この話一昨夜岐阜にても聽けり。對岸某處の藪の中といふ話なりき。それがこの今泉本郷のことなりや否。ともかくも彼等の定住性は全く無きに非ず。たゞ普通の村組織法に服せずといふ迄では無いか。

二宮君は云ふ。このサンカとよく似たる者、磐城相馬地方にてはテンバ、又はテンボと謂ふ。妻子眷族ある漂泊者にして、主として箕なほしを業とす。山の中腹以上に七八つの横穴あり。二十年前にテンバといふ者、時に來つて是に住みたり心を記憶す云々。此名稱は仙臺附近にも知られ、亦さういふ毎年來る乞食のことなりしと聽く。それに家族があり定職がありしか否かはまが確かめず。名の起りは不明なれども、或は是が一つの手懸りかも知れず。關東の田舎にては、サンカといふ語も警察人などは使ふも、一般には箕直しを以て通用し、此中には漂泊する者と、既に一地に土着するものとあるが如し。

七月十日、月よう

長良川を渡り、長瀧寺の廢址の下を過ぎ、北濃村の役場に憩ふ。朝日寺夕日寺の話など

を聽く。

爰にて始めて草鞋をはく。前谷にて長良川と別れ、阿彌陀ノ瀧を見に行く。石徹白駐在の巡查と出逢ひ案内してもらふ。

檜峠ひのまたげの頂上まで、村長と校長との二人迎へに出てくれて居たり。こゝに暫く休息して廣とした山の杉林を眺む。百年を越ゆる木多けれど皆自然生にて、其親木の大木は山の嶺に、幾らとも無く伐られてたゞ巨大なる伐株を殘せり。白山中居神社を拜し奉る。石徹白川はみたらしとして、御社の東と南とを繞り流る。

中の在所の上村五兵衛といふ醫家に泊めてもらふ。金屏風に火鉢、まるで冬のこしらへ也。

白鳥の町に近く、天狗塚山といふ峯聳えたり。頂上には河原石多し。天狗が運びしものといふ。一説にはテンゴ即ち番ばんのことにて、人が持つて上りしかといふも是は一つの合理化なるべし。長瀧寺の址には假神殿を建つ。大なる社殿敷地中央に在り。假本堂もあはれ

なさま也。永享三年の鰐口は存し、堂の中に幽かに經を讀む聲す。此頃御料林の拂下を受けて、恢復の計を爲すといふも、何分にもひどい衰頹にて、或は永久に消えてしまふかも知れず。舊寺屋敷の跡、在家なるもなほ坊の名を呼び、僧は今二口あるのみ。

長瀧寺は泰澄初登山の途次に創立すと傳へ、天台の別院なり。もと三千坊ありと傳ふ。維新の際にはもう十坊に減じ、無住又はたゞ坊守を置く者もありき。そのうち二院は清僧にして、他は世襲僧なりき。一人の同行をも置かず、當時既に農を業とせりといふを見れば、決して排佛毀釋の爲のみには非ず。其坊の主、今多くは他處に行き、屋敷と田畠とを小作に付せり。

寺の舊領は北は飛驒の莊川に及び、南は上之條の中津屋までなりしといふも、近世は僅かに長瀧一村に限られき。郡上の青山侯へは、獨活どくわくなどの方物を献するに止れりといふ。門前といふ字と町屋といふ字とは接続す。町屋は近年の地變の爲か、山と流れと相迫りて宅地を置くべき平面無し。坊の割り方も近頃の地圖にては判明せず。

阿彌陀の瀧は水簾にて、其背後に大いなる岩窟あるさま、今昔の猿神物語を想起せしむ。山上より突出せる巖石を銚子の口と謂ふ。爰に瀧神の傳説あり。石徹白の鬼甚九郎といふ者、大石を以て其銚子の口を打碎き、今のやうに短くしたと傳へらる、瀧の神は伯耆の山へ行くとして飛び去りたりともいふが、なほ岩窟の中にはさまざまの石體を存し、地方の信仰を繋ぐかと思はれたり。

中居神社には、美女下神社等六つの社を合祀す。全村社人にして御師として近國を巡回したり。年貢免除の特典は失ひたれども、今も土地の負擔は少なく、一村を擧げて年々の祭に奉仕することは變らず。

上ノ在所の對岸に、少しの平地ありて長者屋敷といふ。近年石器の異形なるものを掘り出すといふも見ず。古喜美武比古の二人、この長者屋敷に住し、正月十五日に社を作りて、山宇都第三の御子を祭るといふ類の口碑を記憶する者あれども、文書すらなほ心もとなし。まして其一部の援用なれば、到底旅行の途次などに於て考究し得べき問題に非ずと思へり。

上村五兵衛氏の家に、陶器のビンダラヒといふを藏するを見たり。五寸に一寸五分ほどの細長い水盤にて、珍らしい形なり。是にサネカヅラなどの樹液を入れて、鬚の毛のほつれを撫で上げしことも、さして古い世の事ではあるまじと思はるゝが、村に存するは是ただ一個なりといへり。

地形名には注意すべきもの多しと覺えたり。ハバは二つの平地の中間に在る急傾斜地、東國のママと相似たり。信州その他にてハバといふは是とやゝ異なり、寧ろ石徹白に於てダナといふもの、即ち急傾斜の上頭にある緩傾斜地をいふかと思はる。其ダナといふは恐らくは棚と同語なるべし。又アフギといふは扇かと思はる。谷が一時に廣くなつた處を、形によつて斯く名づけたものらしく、是も白馬山彙などに於て、アフキと呼ぶ地形を説明するに足らんか。

又一團の民居、及び田畑の一つの集合をカイツと謂へり。カイツは即ち垣内にて、本來は一人の地主、又は一家の家長が持つて居た名残かと思はる。

この村は土地の賣買にも専ら四至の名を掲ぐることに、中古の文書に見ゆる通りなり。是をシホウガラミと謂ひ、文字では四方境と書きたり。

納なまをカといひ、之を防ぐ蚊遣の装置をカビといふことは、日向の椎葉村など全く同じ。何かよく火を持つ燃料を、藁を以て錘つむいの形に巻き、腰に下げて絶えず燻して居ることも彼と變りなし。只燃料が彼に在つては藤つららの根の、粉を取つたあとのほどろであり、爰では稗粟の殻などを用ゐるだけの差なり。

燒畑この村では六年作り、其後を荒らすこと三十年乃至四十年、中には五十年も過ぎたる杉の自然林さへもありといふ。

農民冬閑の餘業として木を挽くこと、山奥には珍らし。四分板方一坪を一間元けんもとと呼ぶ。材一尺メの八分の一に少し足らずといふ。立木の價としては一間元十錢から二十錢、尺メになほして八九十錢以上一回七十錢まで也。木挽一人一日の切程四間ほど、其賃六十錢位なれば一間に付十五錢、こゝから前谷への運賃二間元に付現在七錢、一人で六間まで運ぶ

のが普通なり。炭の運賃は十貫目三十錢する丁場也。

この村の川、岩が荒くて木流しがきかず、一本流しても木が痛む故に殆ど行はず。たゞ六尺木のカナギ(雜木)位は少しづつ出すのみ。此邊のカナギは檜でも他の木でも、皆沈まぬので流すことを得る也。

七月十一日、火よう

四時に起き五時に立つ。雲深き深山の夜明けを見たり。朝日の峯の頂にほふさま美し。村長校長送りて来る。校長は小谷戸の分教場まで、村長は三面の對岸下穴馬との境まで来て別れ去る。

小谷戸は九戸、三面は五戸。この間一里あり。分教場はこの十四戸の爲に設けらる。教員は一人なり。この二部落は萱葺多し。爰でもクヅヤと謂ふ。三面五戸のうち大久保村長の家のみ杉板葺なり。杉の木の間々得にくくなる爲なりといふ。タダコエといふ路の名、下穴馬の角野より同下大野へ越ゆるをもしか呼べり。別に本道

あり。此方は冬分雪崩の危険を避くる爲に通ふ路にて、荷物が持てぬ故に只越なりと説明すれど、是は古語にて直路即ち近路の意なるべし。

水に映じて岩ツツジの咲けるを見つゝ行く。

下穴馬村朝日の小學校に憩ふ。讀本の中の「海」といふものを説明するに、この何とか淵を一萬も二萬も合せたほどの大きさと云ふのを聽いて、面白くおもふ。さう言つたところで山村の兒童にはなほ海を胸に描く能はざるべし。よき畫を與へたし。

此村の村長と同行して大字下山まで歩む。下穴馬村にては板屋愈々少なく、クヅ屋は急傾斜にて、棟より三尺ばかり下に栗の木の手を通し、其端をぐし押への木と結び合せあり。此邊から腐ること多かるべしと思はる。

石徹白川の合流するより少し上の方に、川を隔て、相對する同名の部落、西を朝日前坂といひ東を角野舞坂と謂へり。九頭龍の本流に入りてよりも、相對して朝日と角野あり、朝日は北岸にて日受けなり。角野は銅山のある村にて陰村なり、仍て思ふに角野は多摩川

上流などでいふ日陰のことならん。朝日の方が勿論早く開くる村なり。
上下穴馬村は下流の數村と共に、美濃郡上の青山氏領にて、陣屋は勝山在の若江に在り
き。此邊の税は深山なれば甚だ低く、下田は舊一村なるが、諸色を結び入れて高十三石あ
まり、大野町の石代を以て金納することゝなり居れり。地租改正後も田の地價一反二十圓
を超ゆるもの無く、畑も亦之に相應す。石徹白では地價十七圓とかゞ田の最上にて、最下
には反三圓といふもあり。畑は通例は八圓位なりといふ。

下穴馬村長はこの下田の人にて爰に来て別れたり。道すがら珍らしき話を聴く。その二
つ三つ。

大野郡の山間には、大家族の家少なからず。たとへば下穴馬村全體では、一戸平均七人
餘なれども、大字下山には十五人ほどの家もあり。西谷村の熊ノ河、濶見なども有名なも
ので、四夫婦ぐらゐも同居し、弟の方が子を多く持てるもあり。何れも仲よく分家をした
いなどゝは言はず。

下穴馬村では、子女の出稼ぎを罷めさせる方針といふ。娘が悪い病を持還ること多き上
に、此邊の女は騙されやすく、又男にはまりやすし。出ることは常に不利といふことを、
村の人々も經驗して居る。

種苗も外から持込んで來る者は、杉でも楮でも何か此土地に相應せぬやうに思ふといふ
話、是はまだ試験が足らぬのかも知れず。しかし椎茸の栽培などは、伊豆から傳習した知
識では、うまく行かぬといふは尤も也。冬は大分寒い土地なれば。

此村昔からの帳面紙を今も製して居る。火事の危急に井戸の中へ投込んで立退き、暫く
たつてから引上げて少しも損せず居るといふ紙で、京大阪の商家の大福帳は、多く爰
へ注文する。下山及び山大納やまおほのの部落にて、冬中之を製す。他の大字にも始めた者はあるが
永續せず。三椶の栽培も起りたれども、土地の者は楮を大事にし、路傍の畑にもまだ楮多
し。大よそは村限りの原料に供して昔風な漉き方を守り、新種を作らうとする考へはまだ
起らず。

住民の衣料、常用は皆麻布なりき。サックリ(裂織)といふのは爰では麻絲をたてとし、ヲグソ即ち苧の屑を紡んだ太いものを緯にする。外の働きにはすべて是を着て居たのに、もう此頃は木綿を着て田に出る者が出来たと謂つて、老村長は歎息せり。しかし木綿を家で著る以上は、古くなればやはり仕事着にする他なかるべし。カルサンの材料なども、けふ途中で見たものは六分までが麻、あとの四分は木綿で、共に紺に染めてありき。

下山では夏着と稱したのが、麻布で作つた夜着のことなりし。今その風止むといふ。

下山は戸數十四、三垣内みちまに分る。屋根葺きには三組合同して一つのユヒ組を爲し、毎年順まはりに三戸づゝ葺いて行くことにして居る。材料と勞力は共に全部が村内のものなり。二十年以上も持つ家もあれど、大抵は十五年もたつと葺替へを要する。葺き方の粗末なものと雪が深いとの爲に、早くいたむかと思はる。棟むねを留めると稱して、栗の木の棒を屋根に通すことは、此邊でも皆して居る。屋根はこゝから腐り始めるやう也。屋根の古萱は林中に堆積し置きて肥料とす。近頃は是をも堆肥小屋の中に入れしめんとして吏員盡力すといふ。

ふ。

萱葺吊として立てた茅山、村の近くにも處々に見ゆ。此村は村山を早く分割したりと見えて、個人有といふ山多く、四千五百尺の荒島山さへも、頂上まで私有なりと聽く。山を持たぬ住民もあり。僅かな山手錢を拂ひて、地を限つて他人の山の本草を刈る。

植林の前一年は、焼畑を作る方が結果よしといひ、粟を蒔いてあるのを見かける。五箇村大字打波などは、今も焼畑を主とす。氣の毒な山中の貧村で、小學校費まで縣からの補助を受けて居る。それでもカンコ踊といふ古風な踊はある村なり。

佛原と此村(下山?)と組んで九頭龍川をせき止めて魚を捕る。上流からの故障申出が多いので、此頃は中絶して居る云々。

暑さに堪へかねて暫らく下山の路傍の家に晝寢をして居ると、大野郡役所から松田君といふ人が来てくれ、この人に同行して荒島山の麓の路をつたひ、東勝原といふ處まで來れば、大野からの人力車が迎へに出て待つて居たり。夕方町に入り、俵屋といふ家に一泊。

是も料理屋兼業なれども庭廣く、松の間の月もよし。

大野の町のはづれ、たしか清水しよらうといふ字のうち也。近頃は五六戸のサンカ定住す。最初たゞ一戸のみありしに、いつの間にか次第に集り住むなり。松田君云ふ。サンカは釣をなさず。竹籠に柄を附けたものにて、主として野川をあさる。川漁を兼業とする部落は、此近くにも古くからあり。其起原については聞くことなし。坂井郡の鐵道沿線にも一つのサンカ部落ありといへり。果してさうか。

七月十二日、水よう

朝早く起きて、町の西なる清瀧神社に参拜す。このあたり城址なるべし。

大野を發し福井に向ふ。平泉寺の故址を訪ふとて、田の中の路を行く。白山社の杉林に苔を踏みて歩み、義經記の昔をなつかしむ。勝山の町にては小學校見學。

九頭龍川の岸を下り行く。小舟戸といふ地に憩ふ。川上の遙かに眺めらるゝ岸なり。

松岡の町にては、藥師の隣に憩ひ、夕方になりて福井に入る。一昨年の名和屋に泊る。

田尻子爵岡局長などすでに來てあり。又多くの土地の人にも逢ふ。

七月十三日、木よう、極めて暑い日。

午前は産業組合中央會福井支會の大會、模範組合の表彰式に参列し、午後は一時間ばかりの講演をやらされたり。其あと寫眞展覽會を見に行く。村落の寫眞には興味を引かるゝもの多し。けふ人に聴きし話二三。

千福といふ村の産業組合は、二町八反ほどの田畠を所有し、之を組合員に貸す。生産組合ともいふべきものなれど、現行法はまだ之を認めず。將來之に由つて小作人の共助を完成せしむることを得んか。

三方郡耳村河原市の伊藤正作翁著書。農人囊自寫、耕作早指南種稽歌、又農業家訓一冊、この最後のもののみ刊本あり。

足羽郡社村しやくだに笏谷は石の産地、石工多く住す。大迹皇子おほあとこのわらじを石工の祖神とする由緒を傳ふといへり。山の石像の作者も彼等の中に在るか。たゞ大膽と評すべき作品なり。

足羽郡の鴨の坂網獵は今もなほ行はる。田地に水を溜めて鴨を誘ふ。その人工の鴨溜のみを、此地方ではフケといふ。フケは沼田の意味に弘く行はるゝ言葉。

同じ郡東郷村、下昆沙門しもがしやもんの福田の二大字は、何れも二三十戸の部落にて、三百年前の地圖には見えず。相互に通婚するのみにて、他の部落との縁組は今日もなほ稀なり。言語は卑野なれども純農にて、他の農家と異なる所を認めず。富める者もあり。然れども外からは肋骨が一本足らずなど、噂せらる。吉田郡松岡村の一部に住するカハヤなども、たゞ籠細工を生業とするのみにて皮革は取扱はず。

三方郡耳村大字郷市ごいちの一部に住する者も皮をさはらず。藁細工をする者及び荷馬車曳き多し。米國に行きて財産を作りし家も少なからず。小濱中學校の優等生にて、今大學に進める者も此中に在り。

大飯郡青郷村西三松に住む者も、籠細工・藁細工などを生計とす。

今立郡の池田には、池田のジウプロといふ者住す。狼おおかみのかしらと謂ふ。詳しいことは

話者も知らず。毎年日を定めて福井の近在まで米の配當を集めに來る。田の盗人を防ぐの驗ありといふ。もとはカルサンをはいて來たものであつた。

七月十四日、金よう

午前は共進會を観る。出品中に目留まりしもの林産部にては油桐樹皮。これは兵の靴などを染む料といふ。又桐實。カトン糸巻、一ダース五錢ぐらゐ、若狭の熊川村より出す。紙布の帯地、博多織の如し。吉田郡森田に産す。

午後福井出發。足羽川の岸邊づたひに、再び大野の町に入る。途中石徹白村の村長に行逢ふ。

足羽川の谷より大野の平原へ越ゆる峠の頂上には、石龕ありて大小數體の石地藏を置く。その中央のものは立像にて、幼兒を抱けるさま、正しく子安地藏なり。頂上の地は大野郡西羽生村大字計石はかりいしなり、此東には坂戸といふ地もあれど、此路は新らしと見えて、頂上の石には中庄の飛地とあり。

九頭龍川の谷には路傍に石地藏多し、多くは形小さく合掌の坐像なり。是等の石地藏は大抵は新らしいもの、しかも眞宗の信仰とは没交渉と見ゆるが面白し。

五箇村にては石棒模倣形の石に、南無阿彌陀佛と彫りたるものを見たり。

大野にては前日の宿にとまる。夜郡長若杉喬氏に饗應せらる。薩摩琵琶を弾く者をよびて聴く。相當に下手なり。

七月十五日、土よう

中村郡書記を加へ同行四人、西ノ谷に入る。瀧川巡查案内す。以下談片、多くは途中あるきながら手帖に留める。

かくま石、杉皮葺きの屋の上に載せる扁平な石、此郡村岡村三谷より出す。之を使ふのは勝山附近に限る也。又この方面にて、下木の若枝を田に入れて緑肥とす。枝は後に薪とす。雨に洗はしむる爲に之を田の端に立て、居るのは一風景。

尾崎彌右衛門といふ人の事業、詳しく尋ねて見たしと思へり。又其家の不幸のこと。

大野の町の人の遊びに行く山中の湯屋の話。

花山といふ峠、淺山郡長の時代に開く。今立郡との境、かなたは境寺、此方は薬師。

上庄村下若生子を過ぐ。此村大字二十八、戸數千二百ほどあり。最も小さきものは五六戸といふ。地域廣く舊村々互ひに隔たり、併合して一大字となす能はざりしならん。

下若生子は三十戸、石灰山ありて年産五十萬貫、うち三十五萬は鑛山に送り、他は肥料に焼きて十萬貫となる。地方に散布す。上若生子は五十四戸、この上下の二部落は共に以前かな山のありし時代に、遠方より移住し來りし者といへり。路の傍には少しも田見えず。山の上に若干の田ありといふ。下若生子の田は、土地の年消費量の四分之一を産する面積、上若生子の田積は更に其半に過ぎず。

然れども其不足の米は平野より買求め、山中ながらあまり雑穀を食はず。それといふのが冬季の生業として紙漉きがある爲にて、此邊にも少々の楮はあれども、多分は隣里より買ひ來りて之に加工す。所謂帳紙なり。

又壯丁の一半は、今も鑛夫として出稼ぎし、毎年郷里に送金し來る。其行先は、おもたに面谷をの他近郷の山だけに限らず、足尾にも行き又臺灣にも行き、弟や次三男の如きはめつたに還つて來ず。

此等の収入ある外に、上下若生子には最大なる部落有林ありて山稼ぎ豊かなり。山入りの権利は、他區人に譲ることを禁ずるも、炭を焼き薪を樵りて之を賣ることは自由なり。面谷鑛山(三井?)にては、精鍊所の敷地は上若生子の區有なりしを買取り、其上に附近の煙害地に對しても、年々の借料を支拂へり。此種の部落収入は、最初には區の協議費に充て、餘りあれば區民に分配する也。

此區の如き財産の多き部落と、他の山林乏しき部落との間に、公有林の統一を行ふは頗る困難の事業なり。仍て一旦村有と爲したる後、常用の部分には區の爲に地上權を設定し、上の方の平生利用せざりし部分のみ、村が自ら經營することゝ爲せり。

保安林制度の効果は、既に現はれた所あり。たとへば上庄村大宇木の本の如きは、從來

水少なき土地なりしに、四目木谷を保安林とした結果、水豊かに旱損の患無くなれり。即ち清瀧川は是なり(此川は赤根川に合して次に眞名川に合し、又直ちに九頭龍川に入る流れ也)。之に依つて木ノ本は地元部落でありながら禁伐を歓迎し、他の部落の者之を犯す者を警戒して居るといふ。

上下若生子を通りて心付きしことは、小學校の割合に立派なることゝ、子供の無やみに多きこと也。亭主の不在がちだといふに拘らず、或は其爲に却つて目に立つか。

家々疊といふものは一枚も無し。藁を大事にすることは非常なものにて、所望すると二三本位を奥から出して來る。屋の棟を留める棒は、此邊では破風の穴から棟と併行に中へ差込みあり。斯くすれば棒で押へた部分の早く腐ることなかるべきも、其代りに萱は飛びやすかるべし。谷狭ければ風の當りが弱いか。

西谷村の下笹又といふ處まで來て憇ふ。此家の亭主は、今足尾鑛山に行き飯場頭はんばがしらをして居る由。此村も上下若生子と同じく鑛夫出稼ぎ多く村に現金が入り、女子供のみ多い處、

殊に中島は消費者の居住地なれば、宿屋が立派なり、又錢湯などもあり。

西谷村は大きな谷二つに分れてY字形をなす。其落合の地が中島にて、中央では無ければどこに役場あり。爰より温見までは五里、自分等の向はんとする上秋生までは三里あり。下流の上庄村と境へは一里。

中島の旅館の主人も、面谷の飯場頭をして居る。遠方に行つて居る者は久しい間還つて來ず。家は女子のみを残し、たま〜留まつて居る青年などは、町の者のやうな服装と顔つきをして居る。

ポツカ(歩荷)に出るのは皆村の者なれども、是が爲に毎日十圓の運賃が支出せらるるといふ。買ふ物は高くなり賣る物は安くなるので大困り、村は今や車道の開通に熱中し、此道を郡道乙種といふに編入してもらつて、年一千圓を是に寄附して居る。但し現在はまだ上若生子の精鍊所入口までしか車は上らず。且つ新道は眞名川に沿うて一里遠くなる故に、村の人はなほ舊道の笹又峠を越えて往復して居る。

此郡上味見下味見の二村は杉を栽うること盛なり。殊に下味見は地の利を得て、池田川の水に筏を浮べ、一日にして福井へ運送し得。しかし斯かる例は寧ろ稀有、多くは夏季出水の期に乗じて木を流すまでなるに、灌漑の利害は之に對して優越し、縣令は四月半より十月迄の木流しを禁止せり。その残りの期間は山中では積雪の時なれば、結局は川は木材輸送には利用し得ざるわけ也。

中島にて晝食をしたゝめたる後、段々と山路を深く上りて下秋生に達す。よく〜の山家なり。五兵衛といふ舊家に泊めてもらふ。夜區長等を訪ひ來りて、土地の話を聽かせてくれる。

西ノ谷村は大字十一あり。其うち二を除くの外は皆紙を作る。純然たる昔風の帳紙なり。大野町の商人の言に、三萬圓無ければ西ノ谷の紙を買占むる能はずと言ひしも、今は是より少し減じたるやう也。生産の大體を言はゞ、上笹又などは四十戸の部落にて、一月平均四百貫の楮黒皮をこなす。黒皮十貫目は精撰して五乃至六貫目の原料を得、これを一カマ

と謂ひ、一カマより三貫目餘の紙を製す。帳紙は四十八枚一帖のもの三十帖を以て一丸といふ。品により多少あれども、一丸の目方は一貫二三百匁より一貫五百目まで也。されば一戸五百貫の黒皮を潰すと言はゞ、紙百貫目餘を産することになる。一貫の相場、今年は一圓八十錢位といふ。黒皮の大野町からの運賃は、雪の時なれば十貫三十錢ばかり、紙の製品を送り出すのは一丸二錢から三錢かゝる。車道が通ずればこの費用半減すべしといへり。

此村の紙、三極などを入れて色を白くし改良させんとしたりしに、從來の消費者之を承認せず、仲買等大失敗を爲し、それに懲りて再び昔風の丈夫な紙を作るに至れり。

楮と桑とは結局は兩立せずとおぼし。養蠶大分盛になりて、楮皮の自給は愈々不可能となる。コクソ(蠶糞)は此邊では大切な肥料、是と厩肥とにて僅かの畠を作る。金肥はまだ全く使はず。田の收穫は反五俵を上々とする。しかも賣買地價は一坪一圓四五十錢、一反四百五十圓にもなる。小作料の勘定にも、此邊では坪何合といふ。田は普通四合位、畠には

一二合のものあり。

黄蓮はこの地方の最も古い産物といふ。嶽山の好き場所といふ場所には必ず之を栽ゑたり。種を播きて三年目の苗を栽ゑ、更に八年にして根を採る。一時二圓五六十錢なりしこともありしが、近年は只の五六十錢にまで下れりといふ(一貫目ならん。一斤ではあるまじ、聞正さざりしは不覺なり)。近傍諸村にても追々に栽培を始め、供給過多となりしが原因かとおぼし。

熊ノ河・温見方面の冬の手わざは蒲脛巾なりき。武生より福井邊にかけて今もよく賣れる。冬の間の脚絆の代用として、需要大なりし也。夏の稼ぎは山畑を主とす。炭は少しも焼かず。運賃引合はねば也。小學校用の炭などは、却りて下流中島の方から運び込むことあり。炭竈を築くだけの計算も立たぬ爲といふ。

本谷の方でも學校又は養蠶の爲に炭を焼き始めしは近年の事にて、昔から炭は鑛山で使ふもの位に思つて居りし也。

下流上庄村木ノ木のボツカの者、今も灰帽子峠を越えて美濃根尾谷ねをだにに往復す。途中は秋生と大河内とに泊る。鹽魚や砥石などを此方から持行き、茶などゝ換へて来る也。但し越前の方にも茶は産せざるに非ず。

温見・熊ノ河の者は、出稼ぎすれども定職無し。もとは乞食に出でしこと牛首などゝ同じかりしといふが事實なりや如何。

木谷の各部落では鑛夫に出て行く。中には妻子を連れて行くものあり、又他所より連れて還る者もあり。本戸の休み所の家なども此例、この女房は秋田の者のよし。近年は各部落とも女の出稼ぎ多し。毎年秋になると募集員が入つて来る。主として攝津紡績といふ工場、大阪の近くに在るものといふ。出稼ぎの男女、殊に女は短期間にて歸り来る。永久に故郷を去る者は無しといふ。紡績に行つた女には、呼吸器病になり還つて来て死ぬもの多しといふ。塵埃の爲ならんが、日頃あまり空氣のよい處に住み馴るゝ爲に、殊に抵抗力が無いのかと思はる。あはれなる話なり。けふも幾人かの蒼く白い顔の、障子の中から外

を眺むるに逢へり。

此村には寺二箇所あり。大野町の眞宗寺の門徒も多し。この方は春秋二度の戒壇廻りの外には僧はやつて來ず。たゞ道場の番人が諸事をまかなふのみ。寺は近くに在つても雪中には交通絶え、戒名をもらふだけにも一通りならぬ辛苦をするといふ話を聴く。

各區の楽しみは村の祭なるに、神社合祀は洵に悲しいこと也。二里三里と隔つれば參拜する者少なく、自然に小さな頃からの親しさは消えて行くべし、池見躑躅といふツツジ、此頃もなほ咲いて居る。水に映るのが最も美しく、池見の名はそれより起るといふ。けふ新曆七月半なるに、小麦もまだ畠に立ちてあり。桃の實は大さまだ拇指のさきほどにて青し。しかし屋敷畠には色々の瓜が花盛り、蚊の聲は殊に夏めきたり。

七月十六日 日よう、雨しば〜、

早朝下秋生を發し、灰帽子はのぼうしの險を越えて美濃の根尾に向ふ。

昨夜の宿にて始めて稗の飯を食す。此家の爐邊の名稱、横座の左側女房座のことをナベ

ず、其に對する客座をヨコジロ、下座をスネジロ、文字にて横次郎末次郎と書けり。小さい瓢のヒサクをこしらへて貫つて持還る。

山中に島あり、大豆を作りあり。鬼の防ぎに五つの方法を併せ用ゐて居る。一・案山子、二・貂の形に擬したる赤い杉の葉、三・石を樹の枝につり下げて動くやうにしたもの、四・ヤキタテ即ち髪の毛か何かを焦がしたものを、日向椎葉のヤエジメも同じ。五・水を引いて來て鉢力の罐を敲かしむ。

處々の休場に石地藏あり。人の亡せたる場所に地藏を立つること、東國の馬頭觀音の如し。地藏の石龜は扁石をたゞみて造り、形狀塚穴に似たり。灰帽子峠の頂上にも地藏あり。此峠武田耕雲齋一行の通過を以て名を知らる。口吟、

ふし谷の奥のほき路の雨の日に昔さへこそ袖沾らしけれ

あら山のそきの萱原刈りあけて稗まく子らも大君の民

根尾村大河原といふ部落は如法の山家なり、淺野某といふ舊家に入りて憇ふ。耕雲齋の

泊つた頃の家は焼けて無し。爐の火棚を極めて太い繩で吊りたり。虹梁といふは大きな梁、大黒柱から背戸の方にかけて、よく見えるやうに張る。非常に太いものにて是が爲に人の手を多くかけるといふ。此家も又里津の柴萬彌といふ舊家も、共に中門口といふ突出でたる部分あり。

白川莊川では、爐に三十貫の重さある五徳(鉄輪)を置くといふ話を爰にて聽く。

西ノ谷にても大河原にても、熊は今もまだ稀に捕られるが、野猪は全く捕れぬやうになり。汽車が通じてからの變化で、伊勢の方から冬になると、山づたひに來りしものが、其爲に來られなくなつたのであらうとのこと。

クラミ三里といふ山路にて又雨に遭ふ。長島といふ處まで人力車が迎へに出てあり。

根尾の樽見といふ部落の川に近い宿にとまる。村長物語に來る。北方町の警察署長もここまで來てくれる。

根尾谷一半は昔の大野郡、今揖斐郡となる。此方は本巢郡に屬す。大河原・能郷・大井水

鳥等、比較的よい部落なり。能郷の白山は又一つの白山登路か。古風なる信仰傳はる。能郷は能藝に因みある地名といふ。終に行きて見ること能はず。

根尾谷の年貢は段木七百五十間なりき。他に數千間の段木を納めて、入用の物品に換へる習はしなりき。一間は一坪三十六才なりしが、根尾段木株式會社にては今は五六とし、別に七寸の横添を爲す故に、三十三才ほどゝなるといふ此勘定よくわからず。西谷の方の二會社では、六七又は丈間なりといふが是も不明。

七月十七日、月よう、

村の名木の櫻の老樹を見に行く。美鳥の陥没地といふを見る。屋根まで沈みしといふ寺、再びもとの高さに立ちてあり。

引かへして根尾川の末を渡り、谷汲寺に詣づ。揖斐の町長及び署長に迎へられ、揖斐の町に行きて休息す。

池野の珍らしい町を過ぐ。二十年とか前までは原野の道の辻なりしが、追々に家増加し

て繁華の地となる。もと入會なりし爲に、家々の標札軒並に村を異にすること、越前吉崎よりも甚だし。即ち家主の出た村に屬することになる也。

大垣の町へ夜に入りて著く。廣瀬署長を招きてサンカの話に夜更くるまで聽く。その要點次の如し。

サンカに四種あり。一をセブリと謂ふ。オゲ・ノアヒ・ボンなどは是に屬す。さゝら・いかき(笹)を賣り、河川の漁をなすはオゲ・ノアヒなり。又ポンス・ボンスケともいふ。龜又すつぽんを捕る故に此名あり。セブリの特色は神社佛閣、岩や橋の下に露宿する點に在り。

二をジリヨウジと謂ふ。神佛の靈驗を説き、女などの弱點に乗じて信心を勧め、供へ物を欺き取る。窮すれば夜は破壊窃盜をなす。淨服や紋付羽織などを着る者あり。服装に於て最も變化の甚だしきものなり。警官法官など看破すること能はず。大抵は無籍なり。

三はブリウチ、是も藥の効能を説くに御夢想などいふことを言ひ立て高く賣り付ける。

桐の箱の中に金襴などに包みて持ちあるく。右二種の者の特色は、町村に入りても旅店にはとまらず。善根宿を求めてとめてもらふことゝて、警官は宿帳にたよる故に、多くは此者の入込みたることを知らぬ也。

四をアガリと謂ふ。難船者とか困窮の人とかいつはりて財産家の惠與を乞ふ。木賃宿に泊り、國々の物持の名を通じあふ。彼等のみは自らサンカなることを承認すれども、他の三種は殺されても言はずといふ。連絡と祕密を守ることには付きては彼等にまさる者無し。戸を切る刃物に特色あり。其切口を嗅いで見るとわかる。即ち彼等のみは決して刃物にびんつけ油を塗らぬ故に、嗅いで其臭無きは彼等の手口と知るゝ也。

明治二十六年中、三河西加茂郡の三國山に、何百人といふセブリの露營せるを發見せしことあり。一年一回爰に集まりて結婚式を擧ぐなりといふ。

碧海郡重原にても五六十人の露營せるを見たることあり。東京附近の山林に居るといふ者も此セブリなるべし。セブリのみにても全國十萬を下らざるべしと思はる云々。

ブリウチの被害は、被害者馬鹿らしく耻かしければ多くは告訴せず。女二人にて來たる者、親鸞上人の話や越後の七不思議の話などをして、善根宿の人たちを感心させ、翌日親鸞の御影といふものと筆草とを賣付けて行きし者ありき。

テントは綿にて刺したる大風呂敷の如きものなり。

セブリには美人多し。彼等の親方にて妾を三人もてる者ありき。彼等の仲間から出て三河の某地に定住せし者、つい身の上話を人にして殺されしことあり。

乞食名といふ處、三河の勘八山にも、又岐阜の金華山にもありき。露營の爲には飲用水の所在を考へ、土の上に火を焚くこと二三時間の後、火を消して其跡に臥せば嚴冬にても寒きこと無しといへり。

岐阜縣關の町にて、曾てセブリを狩り出し、各々國ところを聽きたゞして、それ〳〵其方向へ分けて送還せしことありしが、後二三ヶ月を出でずして又合同して居るのを見たり。よほど巧妙且つ鞏固なる聯絡方法が彼等の中にはあるものと見えたり云々。

七月十八日、火よう

大垣の町に在り。安東俊道君の實父増田氏を訪ふ。又金森某氏の家に行き面會。正午の汽車にて京都へ。

桑木巖翼氏の家に行きて泊めてもらふ。夜新村出君を訪ふ。藤井紫影君に逢へり。

七月十九日、水よう

朝京都府廳に行き、知事その他の人々に面會、又小林區署に行き打合せ。

今村幸男君に逢ひ晝食を共にし、又その家に行きて子供の大きくなつたのを見る。

内藤湖南氏と河上肇君とを訪ふ。桑木家に歸つて見ると、新村君が來て待つて居たり。

七月二十日、木よう

北山行き。二宮君及び府の石井技手を仁和寺の門前に待合せて同行す。

梅ヶ畑村を過ぐ。爰より三尾にかゝる也。葛野郡中川村の役場に立寄り、次で小野郷村の役場に行きて晝食。長い時間村の人の話を聴く。話片二三。

此村の人たちは、月のうち二十日まで京に出る。荷物は途中まで手助けありて、二度分を持運ぶ。柴は三束、一束は六貫目ほど、二十貫目までは較く者少なからず、山の實費を引きて、一日五十錢ほどの稼ぎになる。鷹ヶ峯の方へ運ぶものは一錢に三百目といふ。即ち十八貫にて六十錢、二回分一回貳拾錢。但し薪の總費値なり。

此村二百十五戸にて田は七十町歩、畑は僅かに一町歩、畑があれば皆杉林にしてしまふ。従つて野菜まで京から運ぶなり。養蠶は少しもせず。中川村周山町にても養蠶無し。中川には田畑四丁四反あるのみ。

村には専門の裁縫職人住す。村の婦人はこの手業をせず。

村有地といふもの二村には無し。山はすべて個人有。植樹は杉檜とも春の彼岸前後、時には四月にもかゝる。二月にはまた山に雪ありて入ることかなはず。

杉檜林の下刈は七月、枝打は四五月と九月から十一月まで。柚には他村の者も入つて働く。

車力の運賃は小野郷大森より梅ヶ畑まで、一貫目の松炭が三錢位、丈夫な牛車なら二百貫匁は積む故、一日五六圓の収入にはなる。但し入費も少なからず。三日に一日は休み、米もよう食ふ故に、牛と合せて一日一圓は費える。薪も炭の木も山にて買ふのは一駄十錢位なり。一駄とは五貫目の束十束分、是に枝柴三束が附く。是には別に金を拂ふといふのはわからぬ話であつた。三束から二貫目儀一儀の炭を出す勘定にして居る。こゝに若干の餘裕があるものと思はる。

ネツといふは「ねりそ」、即ち捻ぢて物を束ねる木、小野郷のネツは黒モジその他なり。

野口といふ部落は特殊なり。數十人常に山に入りて藤蓐を採る。山主も別に之を咎めず、筏用に賣るといへり。

歸りは杉阪を通る。頂上好風景、光悦寺に寄り、俗僧と其俗友に惱まざる。杉阪村の道傍に薬師如來の堂あり。間口弘く横に長い堂、其軒に穴のあいた小石あまた、綿に貫き釘に引掛けてあり。野口村を過ぎて歸る。

夜瓢亭へ夕食に招かる。田島錦治戸田市財部河上神戸の五君。

けふ途中口吟

白雪はいつれの山に歸りけんひとりさひしき岡の邊の松

七月二十一日、金よう、

府廳技手の案内にて二宮君と、八瀬大原の二村に行く。役場で色々の話を聞きしも、忙しくて手帖に取らざりしは残念なり。八瀬では野猪の害の話、こゝも杉の植林盛んにて畠至つて少なきことなど。針金工場を見る。

大原では屑綿の工場を見學。小出石より出町まで、一駄四十貫の運賃は二十五錢。一車に五駄を積むがきまり。柴は一束一貫五百匁内外、仲買には之を二錢五厘にて賣る。割木は一束四貫、柴三束を以て之に充つ。價はクノギなら一束十六錢、雜木十二錢。牛車は大抵薪伐る者の自用、且つ其三割までは自分の山を伐る者なり。クノギは植栽す。苗は池田又は尾張より實を取寄せて播く。栽ゑるのは四年木又は五年木。植栽後八年から十年まで

にて初度伐採、それからほぼ同じ期間を隔てて、八九回の伐採をくり返す。

是は昨日中川村にて聴きしこと也。杉丸太を床柱にするには、日うらの方を表に向ける。是を背といふと見えて、背割といふ言葉をつかふ。腹の方が木質悪しといふ。ダン木といふ語はこゝにもありて駄木といふ字を書き、又生駄といふ名もあり。美濃山村にては段木と書けども、もとは馬で陸上を輸送する薪といふ意味であつたかと思はる。

大原の寺々に参り、途中越をして近江に出づ、此道のどこかにて偶立の道祖石像を見たり。場處を忘る。或は八瀬か。

和邇へは行かずに堅田の浦へ下りて汽船に乗る。名物のひがひを注文して待つこと久しく、船がさきに來てしまふ。折に入れさせて案内の某君の家苞とす。

湖上の船は涼し。遙かに阪本三井を眺む。汽車には押川農商務次官同車、面會し得ずして京都に降りる。十時桑木氏に歸る。不在中南才三君訪來るといふ。

七月二十二日、土よう

けふは一日休息、午後内藤氏來られ、ともに再び瓢亭へ行き夕食、南君も加はる。かへりに小川琢治氏を訪ふ不在。

七月二十三日、日よう

朝立たうとする所へ小川氏來らる。十時頃の汽車にて奈良へ、奈良より櫻井へ、初瀬までは輕便鐵道、初瀬からは人力車、吉隠を過ぎて伊賀の名張まで。宇陀川は國堺を越えて流れて居る。名張の康樂園とかいふに一泊。庭内を水自在に流れ、涼み臺のやうな旅館なり。偶然に山林局の渡邊君と逢ひ話を聴く。

七月二十四日、月よう

一人になりて伊勢へ越ゆ。阿保を経て青山峠。五萬分一圖にはまだ存する伊賀茶屋伊勢茶屋、二つともに今は無く、伊勢茶屋の跡には梅の老木あり。歩行の参宮者、此頃になりて再び多くなるといへり。是は勿論春さきの遊山を主とするものなるべし。

途中名賀郡伊勢地村の役場に憩ふ。境に塚を築く風習、名賀郡上津村にはありといふ話。

奈良より伊勢へ

共有地を分割して後にも、その私人の持地の上に乗で、以前の入會權がなほ存する例、比奈和村にはありといふ話。粗穀を其まゝ田に入れる習はしあることなどを聴く。今一度來て見たしと思ひつゝ過ぎ去る。

一志郡倭村を経て久居に四時頃著く。輕便にて津市へ、聽潮館に投宿。長谷川久一君を訪ふ。夜に入り彼も亦訪ひ來る。

七月二十五日 火よう

七時に津を去り、栗真村の國兒學園に竹葉寅一郎氏を訪ひ、所謂特殊部落問題に就いての所見を聴く。非常な熱心にて、午後四時過ぎまで語りつゞける。

此間に大風雨になる。汽車に乗りたれども途中故障多く、靜岡に停車して夜明けに漸く動き、東京に歸り着きしは翌日の正午。

竹葉氏談片二三。手帖に書留めたるもの。

阿山郡中瀬村のうち寺田といふ處、服部川の岸に在る部落、自ら韓人の末なりといひ、

もと八幡搜來記といふ巻物を藏す。昔より屠畜を業とせず。伊賀拾遺といふ書にも見ゆ。

志摩郡磯部村迫間に住する者四十三戸、印度より來住すと稱し、外國文學の記録を藏したりき。竹葉氏は一覽せしも、其後燒棄てたりといふ。

八幡黒といふ染法あり。革足袋などを染むるもの、桑名郡深谷村下深谷部を本據とす。

此村の醫家森某君は陸軍一等軍醫なり。この人自ら我家はこの八幡黒の本家なりといふ。但し由緒書は、是も既に紛失したりといへり。夙(シユク)の者は伊賀名張附近に住す。今は特殊部落の中には算へられず、多くは石屋を業とす。

ササラといふ部落は、度會郡田丸町佐田に十戸、同城田村上地に二十四戸あり。但しササラを製作することは無し。

飯南郡鈴止村は此縣最大の部落。農を營む。公稱五百戸にして事實は七百戸あり。表向きの戸數少なきは何故にや。大阪府泉北郡南王子村は是よりも更に大きく、全村二千戸以上もありといふは眞か。村長中野三憲といふ人は二十年職に在り改善に熱心なり。郡會議

員にもなつて居り、村は模範村なりといふ。

津市の周辺にも有力なる部落あり。竹葉氏は特にこの人々と交際親密なり。従つてその観察する所精細を極め、参考に供するに足るも、自分には重ねて之を確かむる方法無きを憾みとす。一般に毛太く肌の色白く眼に光あり、美男美女多しと感ぜらる。冬もよく汗をかくは食物の爲ならんか。食事は三度々々熱きものを食ふ習慣あり。生の物を食ふこと至つて少なし。

又ザジズゼゾの發音が不得手にて、是がダチヅデドになる傾きあり。伊勢萬歳といふものを好み、宴會にてはよく之を諷ふ。宴會にも膳は用ゐず、食器や盃を牀の上に置く。米麥を磨かずして炊く習ひあり。洗濯物を竿に通して乾すことなく、便器をよく使用する等、二三見馴れざる風俗を存す。末子相續の慣行あり、長男以下成長に従ひて次々と分家す。この他にも聴きたることあれども、それは筆録すること能はず。この人の調査報告書別に大冊あり。精細を極め又同情に充ちたり。

旅行の話 その一

——大正五年・六年——

旅行が流行になつたのは、近世以後のことであらう。誰も彼も旅行する世の中になつて見ると、旅行者にも數十の種類及び階級のあることがよく分る。目的に依つてこれを分類すると、單に健康の爲に、なるべく平常の生活を變更せぬことに努めつゝ、安樂な旅行を續ける者が、最も低級な旅行者であらうと思ふ。

さりとて近世の俳人等の如く、寂しい思ひをする事を目的として旅行をするなどは、吾吾から見れば又餘り拘泥した旅行と言はなければならぬ。併し結局するところ、世の中が如何に進んでも、境遇が自由で心持ちの洒脱な西行一流の行脚僧ほど、羨むべき旅行者は

見出しにくからう。

吾々の如き境遇に居るものは、たとへ生活の半分を遊歴の爲に費しても、到底田舎を見た、田舎を知つて居るとは言ひ得なからうと思ふ。吾々が正眞の旅行をなし得ない障碍は幾らもあるが、殊に此頃つくづく感ずるのは、一つは洋服を着て髭を生やして居ること、二つには日割を作つて旅程を急ぐことである。

職業又は生活の相違と云ふものは、まことに是非も無いもので、現に東京に三十年住んで居てさへ、自分等は本所の生活も知らねば、淺草も知らない。歴史ある日本の首都が、今に及んで尙一個の共同生活團となり得ない事情も、やはり其點にあるので、獨り本所の端々とは謂はず、同じ山の手の内でも、稀に町家の間に残つて居る細い路次の奥などに住んで居る人々の心持は、尙久しい間吾々とは秦人越人の關係である。

自分は春になるとよく郊外の村々を歩くが市街を離れて初めて、こんな人も東京に住んで居るかと思ふやうな人に出遇ふ。例へば三月廿一日などに、老人老女の大師詣りにまじ

つて、鼠甲斐絹の脚絆に中齒の足駄などを穿いた若い娘たちがやつて来る。烏打ちを被つた十七八の色白の息子が、繼竿などを持つて千社札を貼つて廻る。どう考へて見ても、どういふ家の子で、ふだんは何をして日を送つて居るのか自分の想像に浮ばぬ。

此外又例の暗黒世界と云ふものもあつて、要するに古い日本の思想では、この世界に現幽二個の社會が併存すると見た如く、一個の東京の市の中にも、三つ四つもの相互に没交渉の社會が、併存して居ることを思はせる。

その社會のたつた一つで數十年間育成せられた人々が、偶々半月の閑を得てざつと田舎を歩いたとしても、單に珍らしい可笑しいと云ふことの外、心に解し合ふものは何も無くして歸つて来るのは寧ろ當然で、しかも其相手の側に於ては、吾々が近づかんとする場合にも、尙遠ざからんとする傾きがあるのである。

これは東京の人に話しても分るまいと云ふうちは未だ望もあるが、これは東京の人には知らせまい、見せるのは恥かしいと云ふやうな態度で、一番彼等の生活及び心情に近い事

柄が、殊に吾々の目から遮られる。しかも其遮断を試みる人が、主として村の吏員、小學校長のやうな、有力なる地位の人々であるから困る。

片田舎を歩くと、よく小學校の子供が路傍に待ち受けて御辭儀をする。是は洋服を着た人があつたら御辭儀をしると、平常教へられるからで、長者を敬ふといふ修身の教程を、多くの小學校教員は此の如く適用するのである。自分はこれを見る度に、心の底で何時も遺瀨無い反抗を感じて居る。

小兒等に何の弱味があつて、見も知らぬ人の洋服を着て車で行くのに挨拶しなければならぬか。これは獨り封建時代の慣性として恕する譯にはいれない。その弊害は新時代に入つて一段と甚しいものがある。例へば村に入つて行く土方の親分、或は押賣り同然の行商人が、この爲に洋服を着て行く傾きがある。大黒帽にフロックコートを着て、藥を賣つてあるく所謂オイチニの如きは、巡查でも見て居らぬと、上り口から手を伸ばして病人の脈をとつたりなどする。

これ等の弊害は、方法に依つては或は防止することも出来ようが、學問をする爲に田舎を歩かうと思ふ吾々が、何時も簾や硝子戸の如きものを隔て、物を觀なければならぬ不幸に至つては、殆ど忍ぶべからざるものである。

それ程に謂ふならば、髭を剃り洋服を脱いで歩けばよいではないかといふ説もあるが、實は自分も嘗て是を試みてやはり失敗した。和服だと物入れが少なかつたり物にひつかつたりして、不便であるのみならず、ちら／＼と出る太股や足の甲が、いやに生白いので忽ち素性が現はれ、吾ながら馬鹿な仕損じを感じざるを得なかつたのである。

旅程の切り詰めてあると云ふことも、是亦避くべからざる不便である。それも一日に三里とか五里とか、所謂急がぬ旅であるならば、自ら途次の見聞も豊かであらうが、汽車は問題の外として、田の中や川の堤のやうな眞直な畔道を、一步づゝひろつて行く餘裕が無い以上に、町に入り村に入つても、殆ど立ち止り後戻りする機會といふものが絶対に無いのだから、總ての事物が河の水の如く、瞬間に流れ去つて了ふ。

吾々が最も旅の寂しさを感じるのは、廣野の真中に立つた時でもなければ、無人の荒濱に臨んだ折でも無い。朝夕の往來の繁い時に村里を通つて、兩側で呼び交はす女や子供の言葉が、響きばかりで一言も意味の取れない時で、同じ日本に住みながら、何故斯うかと云ふやうな無聊な感じが、ひし／＼と身に迫る。

しかし考へて見ると、これは東京の市中でも、自動車などに乗つて走つて行く人は皆さうである。話の前後を打ち切つて、たつた二言三言の聲の意味がよく腹に入る場合と謂ふのは、吾々などでも家の子供か何かの言葉でなければ實は無いのである。たゞ旅に出ると、これを深く感ずると云ふに過ぎないのである。つまり昔の行脚僧などの如く、路傍の小家に立ち寄つて茶を一つ所望し、時に依つては愚痴な老婆などの話をも聞いてやるやうな境遇でなければ、得られない機會と謂はねばならぬ。

二

昔の江戸の旅行者の知識慾に富んだ人は、多くは旅宿の亭主又は番頭を呼んで来て、土地の話聞いたものらしい。今でも地方に依つてはその痕跡が残つて居る。是が好い宿屋の主人の一つの技倆になつて居つたと思ふ。ところが今日では、此の如き人々は、多くは町會議員などの職務が忙しくて、番頭と謂へば旅の者の、停車場の事しか知らぬ者である。第二の方法としては、按摩から話を聞くと云ふこともあつた。盲目の者は物覚えのいいもので、且つ多くは喋るから、自分等も時々はこの方法を學ぶが、實は頼りない話である。田舎道には人力車夫の中にも、實體な土地の農業の模様などによく通じて居る男が今でも稀にはある。二十年程前迄は、東京の市内にも折々此類の田舎者が出て来て車夫をして居て、思ひ掛け無くも田舎の話聞いた事があつた。

外國人などは非常に驚いて居る。車の上の人と曳く人と、話をしながら道を歩くと云ふことは、彼等の社會には夢にも想像の出來ぬ事であるさうな。従つて所謂世の中が開けると、相手からそんな氣樂なことは爲ぬやうになり、又護謨輪の時節になつては、息使ひの

昔が耳について、自分等でも物好きを話を仕掛けるに忍びないやうになつて来た。これに較べると、山坂の道を徒歩で行く時に、荷持ちの人足と話をすることは、一番世間にかげがまひが無くて、しかも有益である。併しこれに就いて自分の経験した意外の事は、十の場合の七つ迄、この人足が按摩人力車夫よりも、更に無識なことであつた。この無識とは、勿論學問の無いことを意味しては居らぬ。唯その住居地の事情を知らぬものが多いと云ふことである。

吾々が田舎を旅行するのは、冬の真中のやうな農閑の時では無く、多くは田植蒔の前後か、夏休みならば除草や水の心配の最中である故に、忙しい働き日は勿論のこと、折よく休みの日に際會しても、土地の百姓で荷持ちなどに出る者が無い。そこで駐在所などを煩はして、人夫の世話を頼むとなると、指されて出て来る者は多くは他所からの有りつき人の、小作ならば一反か三反か、又は純然たる日傭とりで、金を貯めることに熱心な、前は土地の者からは少しく輕んぜられて居るものが出て来るので、話ほとんど要領を得ないことが多い。

たゞ自分などは此の如き場合でも、他所者の其土地に對する觀察如何といふやうな點から話を進めて、出来るだけ利用しなかつたことは無い。按摩でも車夫でも同じであるが、かういふ者の話ばかりを集めて、さもく間諜でも放つて敵の材料を收拾したやうに、是に依つて皮肉な斷定をすることの危険なのは言ふまでも無いことである。

殊に話をして呉れる田舎の人は、謂はゞ一時の師匠であり、少くとも友人である。證人が法廷で聞かれるやうに、聞くのは一方ばかり、答へるのは一方ばかりでは、僅かばかりの酒手の増額では濟まぬ話である。従つてよくく多辯家でなければ、半途からいやになつて、段々と返事が冷淡になるのである。

此の如き場合も、それが土地の本來の住民であるならば、窃かな彼の利害を察して、多少の相手の趣味を感じるやうな話をすることも出来るが、此場合に於ても、諸所各地を渡り歩いた有りあはせの人足は、利益の交換をするのに誠に都合が悪い。

三

旅行の面白味は、村の形や道の曲り方、珍らしい草の花や鳥の聲等色々の方面にあるが、わけでも他の道樂と同じやうに、追々と人を深入りせしむる程の愉快は、遠くかけ離れた甲の土地と乙の土地とが、思ひがけぬ點でよく似て居て、久しく忘れて居た數年前の旅を、旅の空で思ひ出すと云ふやうなことが、多く旅行をすればする程、複雑に且つ味が益々濃かになることであらうと思ふ。

故に自分等にとつては、假令相手が人足でも子供でも、古い日記を讀むやうなつもりで、昔の見聞を話してきかせる事にして居る。唯意外なのはかう云ふ話を、成るだけ分り易く且つ興味多く、話して聞かせた場合にも、相手の受け答へは多くは至つて冷淡で、人の顔をまじく見ながら、「貴君は旅が好きと見える」とか、又は「よくそんなに覺えて居られる」とか云ひつゝも、腹では少しは法螺もあるだらうと聞いて居ることが、顔の色で好

く讀まれるのである。

かう云ふ折には、自分の空想は殆ど止まる所も無く走つて行く。彼等の祖先は、恐らくは千年も千五百年もの間、冬になれば炉の邊で、自分等よりは今一段分り易い方言で、こんな話をしつゞけて來たのであらう。要するに話は冬のものである。白晝青天井の下で、しかも躑躅や谷うつぎの咲いて居る山道で、この様な世間話をするに云ふことは、こちらは面白いかは知らんが、彼等にとつては實は調子が合はぬ。

成程冬の櫓火の傍の話は單調であつたかも知れぬ。その集團の中に一人の旅商人、又は六部などが混つて居ることは、二年か三年に一度位の稀な場合で、多くは村人のみの群の中へ、三傳四傳して遠隔の話が届いて來る。これに較ぶれば、自分等がして聽かせる話は、生粋の新知識で、しかも成るだけ爲になりさうな部分を選んでするのであるが、何分にも前に言ふ境遇の相違は、一日や二日の交際で徹却し盡すことが出來ぬのである。

それにも拘らず一人で旅をすると、相手の農夫が解らんでも、云はずには居られぬやう

な面白い記憶が、何度も胸に浮んで來ることがある。かういふ折には自分は常に決心をする。

東京へ歸つたら紀行を書かう。あの材料をつけ足して、あの書物を参照して、この問題だけは明かになる論文を書かう。さう思つて二日も三日も、その腹案を練りながら旅を続けることがある。

併し東京へ歸つて見ると、いつの間にか其決心は非常に遠いものになつて、實行しなくとも差支へ無いやうな考へが強く起る。是だけ心持が旅と家とは違ふのである。

偶々それでは自分に濟まぬやうな感じがして、強ひて意志を強固にして、旅行の見聞談を中心とした雑誌を拵へて見ると、滑稽なことには、それが自分を束縛して、厭になつても止められず、書物を読む暇を缺く。殊に可笑しいのはその爲に旅行が出来なくなることである。

自分の机の引出しには、その後一度も開けて見たこともない旅の手帳が、何十冊も轉が

つて居る。中には鉛筆の痕も薄くなつて、殆ど頭の記憶と同じ位の消え方をして居るものもある。

然も自分には一つの空想がある。幸ひに長生をして閑と火鉢が唯一の友人であるやうな時が來たら、眼鏡をかけ、その手帳を取出し、一つづつ昔の旅を思ひ出さうと云ふのだが、そのの空想であることは不幸にして何れの點から見ても明白だ。それよりも少しづつ獨り言のやうに、これを話して見たら、讀者は自分の連れて歩いた人足よりは自由だから、自分の行く先迄ついて來なければならぬ必要もないから、お互ひにやゝ氣樂な交際が出来ようと思ふ。それに申し後れて相濟まぬことだが、趣味の多いこと及び準備知識の豊かなことにかけては、以前の自分の話相手とは比較にならぬ讀者諸君である。自分はその人々の前に、旅の話をすることを幸福と思はねばならぬ。

四

さて如何に物わがりの好い田舎者に對しても、自分がとても話しても駄目だと思つて居た一つの感じを、此機會に先づ述べて見たいと思ふ。

それは我國の村の成立ちの異同を云ふことである。違つて居るといふ點から見れば、小山一つ隔てゝも屋根の形から、厩の付け方から、どうにもなるものを丸で違へて居るが、同じと云ふ點から見れば、三百里五百里と隔つた東西の山の中の村で、眞似をしようもない微細な點が、符節を合するが如く相同じい。この二つの方面が何れか一つで無いから、説明は更に困難である。何故に或物は著しく違ひ、何故に或物は著しく同じきかと云ふことを考へると、國殊にわが生れた國の歴史ほど、無盡蔵の問題を提供するものは無いやうに思ふ。

抽象的の話は成るだけ避けたいと思ふから、爰には或一つの小さな例を擧げて見る。肥後の五箇の庄と峯一重を隔てた日向の奈須と云ふ山村には、九年前に自分は往復七日を費して巡歴したことがある。その村の或部落に宿つた夕方、厩の口に働いて居るものゝ腰に、

珍らしい形の一物が下つて居る。ちようど薩摩芋の大きさの藁苞で、末を繩にして腰帯に結び付け、その一方が燻つて居る。

それはカビと云ふものであつた。夕暮になると農家の周圍に群衆する蠅子を追ふ爲に、常に少しづつ烟を上げて居るので、此村では「カ」をいふのは蠅子のことである。藁苞の中は蕨のほどろ(蕨の根から蕨粉を取つた粕)で、藁苞の巻き方の加減に依つて、火が消えず、又永く持つ様に出来て居る。

この製法を自分はよく見たが、殊に新らしく感じたのは、古くから和歌にも讀んで居る夏の夕のカビは、吾々が蚊帳を以て防衛して居る蚊で無かつたと云ふことで、その時はまだ或はこの地方だけの特例ではなからうかとも考へて居つた。處がそれから、三年程の後、越前の大野郡の山奥で、白山の登山口の一つなる石徹白イシトシロといふ村に宿つた晩、やはり門口に出て見ると、働く人が皆腰に同じものを下げて居る。中に入れた物質は蕨のほどろでは無くて、粟や稗の穂の殻を下した殻であつたが、その藁苞の寸法から腰繩の長さ迄、寸分

も日向のものと違はぬのみならず、その名も同じくカビであつた。

翌朝未明に此村を立つ時には、自分も輿に乗じて腰にカビを下げて出たのであつたが、其後飛驒あたりの方言を注意して見ると、山村一體にカといふのは蟻子即ちブヨのことで、蚊をば特にヨダと呼んで居る。

この類似は成程微細なことであるが、自分が之に依つて思ふことは、平坦部の都會では既に久しい間忘れてしまつたカビといふ品物を、西と東との山奥に等しく分配したものは誰だらう。細かく調べれば蘆苞の堅さ、外形寸法からその勾配迄、實際の必要に合ふ様に工夫をしたものは、果して或一個優秀なる先輩の力であつたか。これを考へることが日本の社會研究の、一つの發足點では無からうかと思つて居る。

それから更に考へるのは、これも北は奥羽の果から、南は薩摩日向の果まで、山水のある處には必ずある米をしらげる水車の如きも、果して傳搬か又は自然の發達か、中々容易には決せられない。

この方はカビと違つて、地方により方言も變り、或はボタンと云つたり、サコンタラウと云つたり色々の名があるが、その形式に於ては殆ど違ふ處が無い。しかも米をしらげるといふ必要の田舎に起つたのは、さして古いことではないのだから、或は見様に依つては誰か隠れたる愛國者が、全國を經廻つて教へて歩いたとも見られるが、カビに現はれた如く凡人の智巧が、結局同じ方向にしか向つて行かぬものとするれば、この水車に限らず、井戸を掘る方法なり、石垣を積む術なり、屋根棟を押へる手段なり、かく一様に恰も花園の花が開く如く、共に開けて行つたとも見ることが出来るし、従つて國といふ共同生活の靈妙さは、こんな點からも窺ひ知ることが出来るのである。

五

しかも流れを隔て丘を境して村の形が違ふと云ひ、生活の狀況が異つて居ると云ふのは、これにも亦意味があつて、一つには出て來た本郷の相違に歸すべき部分も勿論無いとは謂

はれぬが、それよりも強い原因は地理上の条件、土着時代の先後が此の如き様式を必要とするに至つたので、言葉を代へて言へば、村には外部の状況に依つて、色々の種類がある結果となるのである。

これを又實例で證明する爲に、此次には一つ試みに、燃料の側から村の種類を見ようと思ふ。

關東平原のやうな一見單調な地方にても、十里二十里の短い旅にも、よく観ると村の形式は殆ど一つく違つて居る。出来るものならこれ等を分類してみようといふことは、昔から人の時々考へたことであるらしい。確か備陽記であつたかと思ふ。村ごとに其種類を擧げて居る書物がある。例へば平場（ヒラバ）は字の如く、平行なる土地を區劃して住する村である。山寄（ヤマヨリ）は美濃では赤坂以北、又は駿州の愛鷹の南面などによく發達して居る形式である。海添（ウミソヒ）山添（ヤマソヒ）なども右の備陽記には擧げてあつた。

この外同書には山上（ヤマノウヘ）と云ふやうな一種類が擧げてあつたが、他の地方に於ては最も例の多い谷入（タニノイリ）の村は、自分の記憶では別に一目を立て、居なかつたやうに思ふ。備前邊では入と名づけるやうな狭い谷奥の村が、餘り無いからであらうか。

この分類は勿論周到ではない。同じ平場と謂ふうちにも二通りある筈である。例へば目前東京府の管内に於ても、南葛飾郡の如く、僅に屋敷乃至は道路が水面から少し現はれて居るやうな低地もあれば、北多摩郡の如く一體に溝川の乏しい所謂野方（ノガタ）の在所もある。

又同じく海添の村と謂つても、山の陰などに僅かに部落をなして居る村と、追々に遠干潟を取圍んだ埋立地の新田場とは、丸で事情が違ふのである。川添といふ内でもこれと同様に、中流以下の堤が無ければ安全で無い村もあれば、更に又以前の堤よりは外へ出て、水荒れの跡地を開いたやうな村もある。

是迄の人はさまざま注意せぬことであつたが、村の大きさ即ち戸數の多少といふことも、

村分類の一標目でなければならぬ、所謂小村は最初から小村でなければ作れない土地に出来た村であつて、従つてその成長發達に對する制限も、將來の運命も、常に中村大村とは一様でない。

昔から村役人の云ふ言葉「何分私の村は小村で」といふのは殆ど口癖の様であるが、實際古い時代の開墾が廣漠の地に初められて、存分に地形と地積りをした後へ、新たに入り込んだ村は何かにつけて窮屈であつた。

天保年中に長州の藩で作成した周防と長門の風土記は、頗る村の生活條件といふ點に注目してゐる。村の地理關係を簡単に叙述してあつて、この點に關しては却つて近年各府縣に於て町是村是など、名乗りをあげて居るものよりも要領を得て居る。後者は重きを計數におき過ぎるが故に、却つて村の性質、人間で言へば大様おほさまだとか、神経質だとか謂ふやうな特徴をつかまへることが六つかしかつた。

しかしこの防長風土記には、名目をあげての村の分類はして無かつた。自分の思ふには、

百以上の村々を綿密に視察した上は、一々について用水の過不足、草刈場の有無薪炭地の廣狹などを細述せずとも、自ら村の種類に依つて此等の結果の違ふことを推定し得たことであらうと思ふ。

明治二十二年後の新町村は、昔の村の七つも十も包含して居るから、一村を通じてその生存條件を概括することは六つかしくなつた。是が合名會社なれば、昔の村は生れた儘の所謂自然人であつたのだから、村一つは常に略一つの形に生れついて居た理だ。今日町村を論ずる事は出来る限り新しい團體を一個人格として見なければならぬが、この問題に就いては又少なくとも部落部落を區劃して考察する必要がある。

さて今の如く分類した村の種目が、吾々の觀察に如何なる便宜を供するかと謂ふと、今後の村の生活方針を定めるのに、やはり體格の立派なものが陸海軍を志望し、手足のか細いものが手藝技術を職業に撰ばねばならぬ如く吾部落の生れつきによつて、將來の方針が違はねばならぬと云ふ説明に最も必要なのである。

然るに現今の模倣主義は、足を踏み込んだことの無い遠方の府縣の模範村の報告などを讀んで、直ちにその役場の事務ぶりを眞似ようとし、然らざれば理もなく隣村の良い成績を羨んで、末梢の點に於て人の行く後をあるかうとする。いづれも村落として自省が足りないのである。江戸時代には村々の明細記のやうなものを名づけて村鏡(ムラカミ)と云つた。自分は田舎の人々に向つて、この最も新しい意味の鏡を贈りたいと思ふ。

六

是まで田舎を研究する人が、さして重きを置いて居なかつた問題で、自分が特に注意を感じて居るのは燃料の問題である。これについては順序として説かねばならぬ個條が幾つかある。

成程都會の住民が感じて居るほど、地方の人が燃料のことを念頭に置かぬのは、以前には理由のあることであつた。町の保護多き且つ多感的な生活をして居る人々は、日本の如

き温暖の國に住みながらも、冬は炭桶を想はずには居られなかつた。これに較べるとかの古歌にある、栲^{シブサ}衾^{マフ}さやぐが下にといふ歌もあつて、貴人と謂はるべき方々までが、樹皮を以て織つたガサ／＼云ふやうな夜具をかけて寝れば、寒中も麻で織つた衣服を素肌に着て、足袋など、謂ふものも用ゐなかつた時代もあつたが、今では綿フランネルのシャツが在所迄も入り込んだ時代である。粗末な襟巻頭巾の類が、小さい都會で賣れる分量は中々大きい。

又割烹用の問題を考へて見ても、以前よりは鍋で煮る品の種類が遙に數多くなつたやうだ。然も金を出して田舎の薪炭を買ふ人の數が非常に増して居る。山の木は追々と小さく且つ乏しくなる。少なくとも日本の田舎の三分の一位の者に向つては、燃料の問題は殆ど彼等が戸口に來て覗いて居る、然るに公の生活に心を勞すべき人々が、今尙この點に考へるを及ぼさぬのは奇怪なことと思ふ。

それで吾々の知らぬ間に、この百年の間にも農村の經濟は烈しい變遷をして居る。昔の

農村の思想では、木と草とは大きな差別が無くして、共に手間即ち勢力を以て收得し得るものと考へて居た。尋常農村に用ゐる鋤鉞その他の農具の木部や折敷の類は勿論、農家の建築に用ゐる木材まで、自ら採收することを得たものである。偶々面倒な工作を必要として他人を雇ふ場合にしても、これに支拂ふ物品は、物の價では無くして勢力の報酬であつた。農村の作物が多くなり、技藝に對する好尚が進むと共に、これ等木具の一般は商品となつたのである。それでも中以下の生活をする農村の豫算に於ては、殆ど謂ふに足らぬ金額であつた。

燃料の如きは折つて來て市に賣ればこそそれを價のあるものと見るが、農村自身に於ては井を掘つて水を汲み、乃至は川に就いて魚を捕へると同然に考へて居り、又左様に考へることを得たのである。

即ち始めて山野を區劃して新村を興立するものには、水は好いか日當りは好いかと言ふことを考へると同じやうに、燃料があるかと云ふことを考へ、それを開發の一條件として

居つたのであり、今一つ以前に述べれば、これすら問題とはならず、草や木は刈り捨て焼き捨てる必要すらあつたのである。

所謂山寄山入の村が最も早く起つた理由は、單に用水燃料の必要からでは勿論無いが、昔の人が單に薪の手に入る處を條件としたのみでなく、能ふ限り少ない勢力を以て、これを得ようとした希望も原因となつて居たのである。

故に後々部落が幾つかに分れて、愈々境を劃さなければならぬ事情に臨んだ時は、多くの場合にはその境界を谷と直角に切つて、山も野も川原も水も、それぞれ各部落の地域内に含まれるやうに努めたものである。

然るに世の中が平和になつて人口が増殖し、堤を築いて河を防ぎ、豎井戸を掘つて水を上げる技術が進んだ所から、従前家の後に負うて居た山や丘から追々に立離れて、所謂平場の開墾を自由に初めるやうになつた。これが人口増殖の第二期とも云ふべきものである。但し同じ平場と謂ふ内にも、火山の裾野もしくは河に臨んだ段丘地等は、本來雜木を以

て蔽はれて居た地であるから、水利の問題さへ解決すれば、燃料の問題は顧慮することなくして、早くから入込むことが出来たのであるが、今一段と低みの川原又は濱方の地で、蘆薄ばかり茂つて居たやうな土地を開くことは、何か新らしい事情が燃料の供給を保證しなければ、出来なかつた仕事である。

自分の觀る所では、これ等の地面が耕地に變形したのは、村の出来たのよりは餘程前のことであらう。即ち一里二里の距離を本村から通ひ、收穫の前後には所謂かりほのいほを作つて番をする。それでしかも寒い冬の間は、やはり昔の山陰に違つて薪を焚いて居つたのであつたが、兄弟叔父甥の家を分たねばならぬ時節になつて、いつとなく今の低地を以て、安住の地となすに至つたのであらう。

それでも最初のうちは燃料や草に苦勞をするやうなことは無かつたが、土地も開きつくし人も多くなつて、愈々それが不足と決つた場合には、本村と新田の關係をたどつて、山方に入つて薪を乞ひ、草を刈ることを許して貰つた。これが今日の所謂入會山（イリアヒ

ヤマ）の起原である。

今日の民法でも認めて居る如く、入會には明らかに二つの種類がある。一つの野一つの小山を取り圍んで數戸の村がある場合、その野その小山を共同の採薪地として居るもの、これが所謂第一種の共有の性質を有する入會である。第二種は民法では新らしい言葉を使つて、地役の性質を有する入會と呼んで居る、これが自分の故に謂はうとするもので、この種の入會には必ず山口もしくは山元と稱する一ヶ村があつて、他の村々はその村の許可の下に入會する事を得て居るので、普通の地租分擔額の外に、これに對して山手米野手錢ヤマテメノテカネの負擔をして居ることも珍らしくない。

自分も幼少の時から見て知つて居るが、遠方に入會山を持つて居る村々の若い者は仕事が出来なかつた。初夏の頃から初冬まで、一番鶏と共に起きて、馬を飼ふ在所では馬を曳き、馬を飼はぬ在所では荷繩と枋を擔いで山に入り、日暮れでなければ歸つて來ぬ。一駄の秣草一荷の薪の爲に遠い途を往復し、しかも往々にして山道で地元の青年等にいちめら

れたりからかはれたりする。

殊に刈敷と稱して雑木の若葉を田に入れる頃は、日數も短かいので一層骨が折れたやうであつた。こんな村々は多くは交通の便のある處で、農産物が相應の價に賣れるにつれて、天然の綠肥を輕蔑し、人造肥料その他の金肥を無暗に使ふのは、勿論勞を厭うてのしわざには相違ないが、事情を察すれば幾分無理もない所がある。

大都會の生活が田舎に影響した第一着は木材の需要であらうと思ふ。一箇所の町だけに就いて考へて見ても、何度となき大火は一時に數千の家を焼き拂つた。短期の改築、諸侯富豪の立派な普請、其他各地の城下に向つて年々運ばれる樹木は莫大のものであつて、近くの山の木を以て住居の需要に應じて居た昔の組織は先づ壞れた。勿論全國の山を掩ふ樹木の成長率は、久しい間これ等の需要に應ずるに足りたけれども、所謂出しの悪い奥山は計算の外であり、平地に近い謂はゞ需要者の附近に居る山々の木が、先づ切り倒されて後となつて下つたのである。

七

この事實は二つの結果となつて現はれて居る。一つは山の木に値が出て、小民が無代で小屋掛けをすることが出来なくなつた事、これが地主小作關係に於てある結果を生じて居る。第二には山が伐木によりて露出した山腹の土が、追々と海へ流されて各所の浦入江を埋め肥沃なる遠干潟を作つたことである。

その頃になると、僅かな資本で小規模に開くべき地面は、もう大部分出村となつて人が住んで居た。幕府並に各藩で、一度確立した商人地主禁止の方針をやゝゆるめて、資本のあるものに有利な條件で用水路を掘らせたり、潮止堤を築かせたりしたのは、止むを得ざる事情であつた。茲に於てか全然抹草山薪山と絶縁した新しい形式の農村が、頻々として各地の海添川添に起つたのである。これを計劃した都會の住民と同じく、農家が燃料に向つて金を支出しなければならぬ事情は、この時から既に發現したのである。

越後の蒲原平原を歩いて見ると、處々の溝河の中まで立白タテシラを小形にしたやうな木が流れて居るのをよく見掛ける。たしかあの邊でもこれをコロと謂つて居るやうである。即ち農村が薪を買ふ著しい一例である。恐らくは信濃川沿岸の低濕の地や、處々の濁端の地が、所謂商人地主に依つて開發せられた時代からの現象であらうと思ふ。

この蒲原一帯の水田は、農夫が臍あたり迄も泥に浸つて耕耘をする。所謂ふけ田の優なるもので、田の畔の代りに蘆をたて、置くやうな有様で、稲の架乾しをするハサキ又はハダの材を得るにも難儀をする位だから、竈に木を焚かうとすれば勢ひ、水源の産地から、遙々コロを喚ばねばならぬのである。

自分はあの地方を歩く時に、薪を買ふ者が如何にして自他のコロを辨別するかと云ふことを知らうと努めたが、どうしても分らなかつた。今のやうな生活の激しさでは、昔のコロ流しは到底永く續かず、さりとて番人を付けて五十八十のコロを流して居つては、愈々燃料の増費を免れぬ結果に至るであらう。

川に流した薪は、今れも樹皮が無くなつて、後先きが丸くなつて居る。多くの漁村では昔からこの類の木の主知れぬものを拾つて、無代の燃料をつかつて居たらしい。年に二度や三度は洪水の起らぬことは無いといふ日本では、流木の海に漂出し、又は川底に埋まる分量も相應に多いことと思ふ。その失費が悉く薪の市價の内に加はるのである。

漁民の薪は此の如くにして久しい間無代であつた。鹽木を拾ふと謂つて、以前は鹽釜の燃料すらも漂流木で間にあつた位である。今でも邊鄙な漁村を歩いて見ると、見事な材木を打ち碎いて薪にして居る處もあつて、これ等は悉く河口の大水に依つて、主の不明になつた木である。今後追々各地の材木商が店員をして浦々を歩かせ、焼き印を辿つて漂流木を取戻して歩くやうになるであらうから、漁村に於ても燃料の問題は今一層痛切に感じられるであらう。

阿波の吉野川の谷を下つて見ると、川添の村々ではやはり榎木の如く兩端の丸くなつた木を、家々の壁の際に積上げて居るのを見かける。この邊でも出水後に漂流木を拾ふ外、

燃料を得る手段の無い人民が、可なり多数に住んで居るらしい。

多くの山川の川原などを観ると、砂原の小石混りの中木端が頭を出して居るのが時ある。出水後には特にこれが多いので、激しい労働の出来ぬ婦人老人などが、恰も蛤でも掘るやうにこれを土中から掘り上げて、乾して薪にするのだが、上流の土佐の本山本川筋の村の人々には、この事實を好く知つてよんどころ無いものと考へて居る。多くは態々流した木では無く、出水の爲に倒れ込み流れて下つたものであるらしい。

自分は秋の初めこの吉野川の川流を下りつゝ、多くの里人が川原に下りて木を拾ふのを、つくづくと見て居たことがある。戯れて「婆あは川へ柴刈りに」と謂つたことを、今でもまだ記憶して居る。

八

新潟縣などのやうに、薪材の多い山を間近かに控へて居る處では、コロを買つて竈に焚

くことも、或は無理で無かつたかも知れぬが、それとても追々に杉檜が植ゑ立てられ、村持薪山の狭くなり且つ荒れて行く今日となつては、果して將來の便宜を期し得るかどうか。殊に賣らうにもさう澤山の米が残らぬと云ふ小作人の境涯では、何か別種の燃料供給方法を、待たねばならぬのは自然の話である。

尾張の海部地方(元の海東海西)なども、一望木の無い埋立新田で、乾いた土は僅に堤防の附近でなければ求めることの出来ぬやうな事情であるが、此邊では溝川づたひに薪を流す風習は少しも無かつたやうで、大きい地主の家庭では、恐らくは薪炭商の手から薪炭を買ふのであらうが、小民は總て藁を燃して居るやうである。それと云ふのが此邊では、餘程上流へ行かねば木の立つた山も無く、従つて薪の價が安くないのと、一方には小作人の耕作反別が、越後などに比しては一層に狭くて、燃料の爲に金を拂ふことは、絶対に經濟許されぬからであらうと思ふ。

近年排水の工事が進んだから面目を一變したけれども、その以前はこの邊一帯も田舟に

乗つて稻を刈ると云ふ場所である。水場の稻は草丈が非常に高いものである。さうして永い間水に浸つて居る爲に、外の用には適しないから、誠に彼等にとつてはうつつけの燃料である。

殊に經濟組織の進んだ處では、藁を焚く農家の窟から、藁灰を他の地方に供給する商賣があつたのである。尾張西部などでは、主としてこの藁灰は中島地方の野菜耕作地、其他桑や苗木などを作つて居る畑場の方面へ、これもやはりこの低地を縦横に貫流してゐる溝川を利用して、運搬せられて居るのである。

諸國の城下の町に往々にして灰屋といふ屋號などのあるのは、恐らくは肥料用の藁灰を大規模に賣買した痕跡であらうと思ふ。武蔵野でも川越の町には久しい以前から、月々の灰市といふものがあつた。川越は人も知る如く、島作の行はるゝ高臺地と稻作の盛んな低地との、境界線上に出来た一番大きな町である。川越の灰市は畑場の根菜類が灰を肥料として要する爲であることは勿論であるが、同時に又この國東半分の農場で、盛に藁を燃料

として居つたことを證明するもので、地圖の上では多くの意味も無いやうな屈曲した大小の溝川が、運送費用の節約を助けて居たことは誠に豫想の外である。

處がこの藁灰に就いても、亦一個の小さな時代の影響を、受けねばならぬ機會に逢着した。それは何かと云ふに、稻藁の要途の擴張である。近代の農事改良では、牛馬も飼はねば草生地も無いやうな村々までに堆肥の奨励をして居るが、今日の稻藁はムザ／＼腐らしてしまふには餘りに高價になつた。

先づ第一には藁製品の需要の増したことである。日本海沿岸の諸縣、殊に東北地方の北海道に近い農村から、年々供給せらるゝ叭・蓆・繩・草履の類は、集まつては非常な金高で、優に大資本の商人を活動せしむるに足るばかりである。獨り北海の漁業地方と謂はず、内地でも鑛山又は工場に於て、これ等の物品の需用は年一年と増して行く。

又個々の農家の生活に就いても、以前草鞋を履いて居たものが下駄や靴になつた代りに、徒跣足の連中が草履をはくやうになつたことは非常なものである。

今一つ注意せねばならぬことは、疊の床としての藁の需用である。これ迄はスノコに蓆を敷いて坐臥して居つた農家が、粗末ながらも普通の疊を敷き詰めるやうになつたことは、必ずしも一地方だけの現象では無い。常は板敷を便とするやうな百姓家までが、且つは名聞の爲に、室の片隅に疊を積み上げて置くといふ實例も、自分は各地方に於てこれを見た。麥稈の方は麥稈眞田の原料として世に知られて居るが、これは至つて小部分で、その他は各自の屋根を葺く位より以外は、これと云ふ用途も無いけれども、稻藁に至つては今や既に立派な商品、農家の簿記には収入として新に掲げねばならぬ項目になつて來た。この事情を助けるものは、やはり鐵道その他の簡便なる運輸方法である。

嘗て肥後の球磨川の岸にある坂本と云ふ製紙工場を觀た時に、原料の藁がどの邊から來るか尋ねて見ると、遠いのは岡山廣島あたりから來てゐる。これは品質を選択する爲では無くして、單に安く買入れんとするが爲に、米産地たる熊本縣をさしおいて、これ程遠方の品物をも搜すことが出來たのである。

九

話がそれるが、日本で西洋紙の工業が起つた最初の動機は、原料に適する稻藁が無代同様であるといふ事實が、倅かに其一つであつた。然し今日では最早それは斷念すべきこととなつたらうと思ふ。

此の如き諸方面の需要に加へるのに、馬を厩舎で飼ふ陸軍の秣用も亦決して少額ではない。結局これまで心安く藁を結んで、甕の中に投げ込んで居つた小農の家では、是等各種の競争者と對抗して、この燃料問題を考究しなければならぬはめに陥つたのである。例へば愛知縣の如き交通の便利な、小農の金勘定に鋭敏な村落に於て、排水土工の進んだ後、世間並みの藁が出來るやうになつてから、彼等は藁をさへも澤山には燃しかねるやうになりはせぬかと思ふ。

日本人は今日迄も生の食物を多く攝取する人民であつたが、今もし燃料の關係から焼く

べき魚も焼かず、よく煮るべき野菜も少しゆでて食ふといふやうな癖を生じたら、問題は單純な經濟問題では無くなつてしまふのである。

自分は嘗て靱殻の燃料としての使用を考へたことがあるが、靱の敷物にこれを使ふ農家は別として、普通の百姓は久しい間、實はこのものゝ始末に難澁して居たのである。時に依つては田の中に掻き集めて面倒を見て灰にしたり、或は灰小屋の中でこれを處分する爲に、特に努力と費用とを投じて居つた。もしこれが一部でも燃料として用ゐられて、稲藁を節約することが出来たならば、一舉兩得と謂はねばならぬ。

これも愛知縣のたしか三河方面で、靱殻を焚く竈を工夫した者があつた。勿論藁のやうにパツと燃え上つて、心地よい火で人を楽しませることは出来ぬけれども、取扱ひやうに依つては少なくとも補助燃料、即ち火をつないで置く用途には供することが出来る筈である。どう云ふ風にか工夫して、便利な竈を小農に與へたいものだと思ふ。

自分の經驗によれば、農家には早くから燃料節約の氣風は行き亘つて居たやうである。

よく金錢を湯水のやうに使ふと云ふが、吾々の目から觀れば農家では、湯も中々粗末には使はぬ。例へば風呂に入るにしても、都會でなら一人入る位な湯に、近隣の者を招いて、成るだけ水もうめずに、微温くなつて初めて薪物をくべるといふ有様で、今日迄身體を清めて來たのである。

この類又は沸騰の必要の無い湯などには、靱殻を代用して最も適當であらうと思ふ。藁を焚く竈の一つの不便は、誰か一人竈の前につききりにして居なければならぬことである。屢々灰を掻き出して藁を投げ込むやうにせぬと、不經濟でもあり又危険でもある。この點に就いては一抱へもあるやうな槽カサを爐の片隅へつき込んで、終日ブス／＼と燻らして居る山家の人々は氣樂なものである。將來農家の勞力が充分に利用せられて、薪を刈りに行く手間も惜しいと云ふやうな時節が來れば、この點から觀ても藁は農家の燃料には不向きである。自分は觀たのでは無いが、三河邊の人が考へ出したと云ふ靱殻の竈は、中に金網か何かあつて、自然に少しづつ火の氣の絶えぬだけに落ちて行くやうになつて、然も火の

用心も悪くなく、野良から歸つて見ると湯が沸いて居ると云ふやうなこしらへだといふ話である。事によると是が一つの燃料問題の轉機をなすのかも知れない。

10

尙少しく村を見て歩く面白味に就いて話して見よう。日本人は種々なる骨格、種々なる肌の色艶をもつて居て、如何にも混合した人種の如く外人等より考へられて居る。吾々が見ても此人はどうしても蝦夷の末に相違ないとか、争はれぬ南洋人の特徴を以て居るとか、感ぜられる例に、幾らも遭遇する。

併し假りに此推定が當つて居るとすれば、尙一段と意味深いのは、系統の異同が地方的で無いことである。即ちどの村へ行つても、三種四種の顔だちが雜然として混和し、恰も最初から一部民の如く共棲して居るのである。

何でも吾々の祖先は、今日の安住の地を相する迄に、少なくとも二度三度の國內移動を

したに相違ない。戦亂の爲に追はるゝ不幸は、他の國民に比すれば少ないのに、人口が過剰するごとに、都會を造らずして新たな山野を拓いた。これは多分中世以前の社會組織の特質に基くものであらう。つまり吾々が祖先は、國柄か人柄か知らぬが、兎に角優秀なる造村の伎倆をもつて居た。大陸の廣漠たる平原に居る者のゝ夢想だもする能はざる巧者を以て、山腹又は水際に邑落を造つた。

この無意識の技藝の出來榮えを、吾々は到る處に見ることが出来るのである。もし相應の同情と研究心を以て掛るならば、此の如き村を造るに至つた昔の人達の心持を、随分明瞭に知ることが出来るだらうと思ふ。

初めて村を相する人々にとつて、燃料よりも更に重要な條件は飲料水の供給である。今でこそ薪に價はあるが、開發の當初に於ては刈つて捨てねばならぬものが皆薪であつた。之に反して、地表に澄んだ水を常に得るといふことは、決して容易では無かつた。勿論初は鳥や獸も共通に、流れ川の水を掬んだに違いないが、多數の者が河の岸にのみ住んで

居られぬことは當然の話で、殊に耕作に適する平野は流れから離れた處に多く、屋敷を定めるのは何れか一方を遠くにもたねばならぬことになる。

伊豆の海島では今でも飲水を得る爲に、婦人の勞力の半分を費して居る。内地の日本では幸にして、甕を頭に乘せて遠く歩くやうなことを要しなくなつたが、それにしてもやはり水を掬むといふことは、可なり大きい勞働の一項目であつたと思はれる。

深山に入つて見ると、獵人や樵人がカラ澤とか水無澤とか名づけて置いた谷が往々あつて、水を大事にした昔の山民の心持がよくくまれる。

山の多い我國のやうな地形では、到る處に水の音を聞き得るやうに考へられるが、それはまだ平野に近い浅い山の事で、繁茂した樹林地の中では、却つて流れに出逢ふことは少ないものらしい。

それでも昔の拓殖者は、出来る限り水の流れを離れまいとしたに相違ない。水の流れを傳ふことは、道の無い未開地に入り込む爲にも必要なことである。

しかし穀物を作る面積が不足になるにつれて、どうしても水の音の聞えぬ處へ引移らねばならぬ必要はやがて現はれた。此時に當つて彼等にとつて大和の八咫鴉よりも貴重なものは、處々の清き泉、即ち地下水の露頭であつた。

その時代の事情は、武蔵の平原を歩いて見ると、到る處にその痕跡を止めて居る。人のよく知る如く、武蔵野名物の一として古くから、堀兼の井と逃水がある。堀兼は今でも堀兼村などいふ村の名もあるが、果して或一個所だけの話であつたか否かは疑はしい。逃水に至つては色々の説がある。或は苦水(ニガミヅ)のことで、作物に有害なる潮水をいふとの説もあるが、その様な海岸近い地方の話とも思はれぬ。或は又野馬陽炎の類で、水ありと望んで行つて見れば其處には何も見えぬといふ、沙漠のオアシスのやうな話も傳へられて居るが、これも名稱から起つた想像説らしい。第三の説として今まで流れて居つた河が冬に無くなつて居るのが逃げ水で或は川越の附近に年不取川と稱して、大晦日の晩ばかり不意に一滴も無くなる川があるといふ説もあるが、此後半に至つては明らかに浮説で、

必ずしも或一箇所の状態では無く、この平原の地形として、屢々地下水の出沒することを意味する普通名詞であつたらうと思ふ。

川が地底を流るゝ例は諸國に多い。飛驒の一ノ宮などでは、明神が法樂の聲を防ぐるを惡むで、社の附近ばかり、水を底へ移されたといふ口碑が出来て居る。他の多くの流れでは、満水すれば上を流れ、減すれば所謂水無瀬川になるので昔人の知識ではこれを神力に歸するやうになつたのである。

攝津の丹生の山田には有名な山田の白瀧話がある、白瀧姫の子孫が名乗つて居る栗花落と書いてツユリといふ苗字は、地下水の出沒に基づく口碑の類で、他の諸國に於ても折々聞く話であるが、つまり栗の花の落ちる梅雨の頃になると、常は水のなかつた靈地の一隅に、清い水の湧くのを水神の奇蹟とした迄である。

近世の井神様は水を汚す者を治罰する至つて消極的の神様であつて、殆ど何の爲にこの神を崇拜し始めたかを、想像することの出来ぬまで變遷して居るが、開國初期の平民生活

の光景を推想して見ると、水の神の神徳を拜まねばならぬ理由がいくらかも有つたのである。そこでたちもどつて武蔵野の散歩の話をするが、東京の市民が二百年の長い年月、飲んで居た處の井之頭の池を初めとして、相模川でも日暮川でも、それから石神井川でも、今では殆ど民家のセ、ラギの末の如く見做されて居るが、試みにその岸に沿うて溯つて見ると、源は何れも一箇の泉である。

水が豊富なれば溢へて清い小池となり、それ程充分に無ければ井と稱して柄杓を以て掬むのである。思ふに井戸の井は居(キル)の井と同じ語であらう。簡朴なる古代の日本人は鳥が木に棲むのも、水が流れて澄むのも人が屋敷を開いて住するものも、等しくスムといふ同じ言葉を以ていひ現はして居た。それが後に分化して、河水を堰で止めたものを井堰と稱し、飲用に供する細小の瀧壺に、井の字を當てゝ井戸(井處)井カハなどゝ讀んだ迄である。

東京から西へ三里四里を出て見ると、高い森があれば宮があり、宮があればその一側が

此邊で謂ふハケ(崖)になつて居て、小さな井の頭が現はれて居り、その附近に若干の家があつて、流れの末が田に灌いで居る。

だから丘の谷合などに帯の様な細い田地のある處を横ぎる時に、もし道を曲げて西又は北の一方へその田に沿うて行けば、必ず宮をめぐつた小さな部落に衝き當るわけである。

多くのこの清水は、今では御手洗など、稱して普通の用には汲まぬことになつて居るが、これは人家の數が増し、縦井戸を掘る術が進化してから後の事で、必ず初めて社を祭つた時の状態のまゝで無いであらうと思ふ。

泉と神社との離るべからざる關係は、近頃自分が殊に興味を以て研究して居る事項である。此場合に問題となるのは、此二者と村との相互關係である。この三者の内で、清水は天然のものであるから最も早くからあつたとして、他の二つの社と民家と、通例どちらが先に出来たものであらうか。

例へば往來の人々が清水の所在を發見して、その恩惠を感謝する餘りに、幣を立て、神

を祭つた處へ、後に一軒出来二軒出来て、通例いふ宇宮前などの部落が出来たものか。乃至は又水について居を占めた五七軒の農民が、その泉の涸れずに永く澄むことを願ふ處から、泉の神を祭るに至つたか。同じ武藏野の中にある村々でも、事情は必ずしも一樣でなからうと思ふ。

一一

最初此國がなほ平行なる林叢を以て掩はれて居た時代には、家を構へるにも旅をするにも、水といふ問題は今日よりも遙に重要であつたかと想はれる。廣野の中にある清水は、今の人の考へでは殆ど發見する方法は無いやうであるが、この點にかけては未開の人民の方が、遙に優れた能力を持って居つた。山中でもウチと稱して、猪鹿の開いた通路は、必ず清水から清水につながつて居る。例へば日の反射、風の速度もしくは最も微かなるせうらぎの音の如き、野獸の感覺を刺戟するに足るべきものは、單純なる古代人もこれを悉く知

つて居たのであらう。

東北地方を旅行すると、此痕跡は今でも見ることが出来る。中古以前の田舎では、晝の休み場は勿論のこと、夜の宿にも必ずしも旅宿の便宜を得ることが出来なかつた。此の如き時代の驛次は常に清水の所在地であつたかと思はれる。

高清水とか宮清水とかいふ地名ある場所が、今では有名な邑落となるに至つた原因も亦これにあるらしいのである。武藏野の野中の清水の如きも、平原の面積に比べてその數は決して豊なりとはいはれぬ。中古七黨の武家がこの野の開発に努めて居た時代に、四方からこの野を横ぎつた道は、必ずしも最短距離の直線では無かつた筈である。夏の日盛りに慕ひ寄る大木の影、もしくは雨風をよけて晝餉をしたため得た崖下の清水などは、常に彼等にとりては重要な地點であつたらう。

自分等は地圖をひろげ、又は實地に望んで常に斯う思ふ。廣い野中に偶然出来たと思はれる十文字又は一續きの高臺の中で、特に選ばれたる登り道は、何か今の心理學ではまだ解らぬ人間的事情が、原因をなして居なければならぬ筈である。

而うして假にそれ等の地點に、今日出づる清水が無いとしても、元はあつたものと見れば説明の出来ぬ四つ辻や坂元の多いことは、恰も以前には日影となるべき大木があつたと見なければ説明の出来ぬ橋本の里と同じである。

川を隔てた二つの部落が交通を求めた場合ならば、渡し場橋場の成立ちもよく解るが、廣漠たる荒野の中の屈曲して出来た道、その道の行きどまりに二三個の茶店などで成立つて居る橋本の里は、一番初めは遠く望み得べき樹蔭を慕つて、近付いたものと見るより外は無い。

その樹蔭の水が流れでは無くて、湧き水であつた場合も事情は同じことで、南北から來る人と落ち合ふ處といへば、やはり此の如き「清水流るゝ柳かげ」であつたであらう。

斯ういふ想像から、自分は武藏野の多くの村にある鎮守の御手洗を、まだ家も無く田畑も無かつた昔から、既に現はれて居つたものと思つて居る。

昔の人は大膽でもあれば、又外的に迫られた事情もあつて、野宿も怖れず、妻子眷屬を引き具して、未だ試みざる川上の谷に村を造りに入り込んだ場合も無かつたとは申されぬが、普通考慮の結果の移住開拓ならば、必ず前以て二度三度の探検は試みるであらうし、特にこの爲に視察には行かぬ迄も、往來の序に熟知したる場所を、選ぶべきは自然のことである。

而うして用水の問題が古人の生活にこれ程必要であつたとすれば、つまりは清く豊なるを以て人に知られた清水の處へ、辿りつくのが自然の歩みで、恐らくは多くの場合に神を奉じて清水に趣くよりも、既にまします水の神に許されて、其下流を掬むといふことになつたであらう。

一一一

此次には、人家の數と水との關係、新らしき水の發見、鑿井の術、横穴といふ順序に、

叙述の歩を進めて見ようと思ふ。

自分が子供の頃知つて居る關東平原の二三の町では、道幅が街道の繩手路よりは倍も廣くて、その中央に二三町おきに一つづつ、鑿り井戸の列をなしてゐるものを見た。今は勿論警察の命令に依つて埋められて居る。道幅の廣いのは一つは日限市(ヒギリイチ)の痕跡でもあるがこの鑿り井戸の併列も亦これにあづかつて居る。

東京でも自分等は微に記憶して居る。一二の市街には道中の井戸があつた。例へば今電車の横切つて居る市ヶ谷のヤキモチ坂下に在つた井戸などは名水であつた。普通のものよりも大形の井戸側の、周圍を駒寄せで圍つてあつたかと思ふ。

箇々の小農が屋敷の隅の一つづつの井戸をひかへたのは、鑿泉の技術の餘程普及した近代以後の事であるらしい。その以前は右の如く共用の井戸の水を分配して居つたものである。

都會から田舎に來る旅行者が屢々意外に思ふことは、燃料も豊かで人の手にもことかゝ

ぬ農村で、風呂の水の分量が甚だ少ないことである。極端な例は昨日一昨日の風呂を沸し直して、白くなる迄つかぶやうな水の儉約をするといふことは、新らしい市街生活に馴れた者の、殆ど理由を見出すに苦しむ所であるが、やはり亦一つの泉で多数の家を支へた因習と見るの外はない。

道路の中央に井戸を掘つて置く習慣は、恐らくは町中に用水を引く慣習から出たものと思つて居る。而うしてこの慣習は更に遡つて、小さい流れを挟んで屋敷を割り當てた古い生活の名残であらう。

五戸三戸の一類が集り住むならば、大川の岸にも好い地面はあるか知らぬが、何十戸もまとまつた農民が、一處に邑落を造るとなつては、無理無しに水害の危険を侵さず、宅地を見たてることの困難な場合が多い。それで若干の努力を費して溝を堀り水を引き、なるべく公平に之を使用せんとする爲には、右申すが如き町中の水路、又は鑿井を作ることになるものである。

此類の用水路は、或時代までは確に町の美觀であつた。家々の女房や娘が、家具を提げ道を横ぎつて川端に下つて行く趣は、古い淋しい町を晩方などに通りあはせた旅人の、永く忘る能はざる風情である。

普通洗場と稱して一段低く置いた平石又は踏板を、地方に依つてはカドとも呼んで居る。山陰では是を井ドバといふ。カドは即ち川處で、必ずしも洗ひ場でなくとも、舟付き徒渉其他一線の川の内の、殊に生活に關係の深い地點に與へられた名である。

町中を流るゝ小川のカドの邊りには、多くは柳、又は柳ならずとも涼しい木蔭があつて、夏の頃の旅には人でも馬でも、自然に流れに接して歩いて居る。これが又古い驛次の歌心を催したものである。

しかしながら或程度以上にその町が發達して、溝の小石に泥が付き、鹽魚の骨が滯つたり塵芥が流れたりするやうになる頃は、他の一方では必ず交通障碍といふ苦情が起る。そこで最近二十年三十年の間に、昔美しかつた町の小川の多くのものは、官命を以て埋めさ

せられたのである。

全體今いふ町の起原は、極めて簡略なものである。所謂戦國の時代に、僅かな丘陵の尖端に住んで居る武家が、自分の保護すべき百姓をその丘の麓に住はせたのが始まりである。關東では根小屋とか寄居とかいふのがその普通の名稱である。根小屋寄居の多くは片側町で、便宜次第或は丘を背にして外に面し、或は道を隔て、丘の方に向つて建てた。これが所謂城下町の双葉である。

後者即ち道を隔て、丘に對して建てた町は片羽又は片原又は片平ともいつた。片羽に住む人民は、丘の麓を廻つて流るゝ水に寄つて生活した場合が多からうと思ふ。しかし岩の防備に故障の無い場合には、時としては丘の崖からしたゝり下つて来る泉を、汲んだ場合もあつたか知らぬが、斯う云ふ處では、水の不足が夙に城下の發達を妨げた。

その後世中が靜かになつて、武家の保障が無くとも安全に生活の出来るやうになつてから、少しづつ丘の麓から遠ざかつて、成るべくは緩傾斜のある廣敞なる地を相して、町を

移して行く傾向が出来た。これもやはり用水の關係が原で、斯ういふ地形で無いと百戸以上の人民に、常に清い水を供することが六つかしかつた爲である。

昔開けた道路には、屢々僅かづつの上り下りがあつて、如何にも人馬の足の疲を顧みなかつた様に見えるが、その理由は必ずしも常に此の如しとはいはぬが、やゝ坂が、つた處で無いと、驛次の宿場を創設又選定することが困難であつたからである。

然るに何物の發達にも行き止りがある如く、此の如くして一旦は便利であつた町の飲み水も、後には追々と不潔になつて、何分にも辛棒が出来ぬまでに町は發達して來た。

最近三十年間の町の歴史は、一方に於ては以前の一筋町が多くの横丁を持つて來て、町中の小川を邪魔ものにし、その埋立てを餘儀なくすると同時に、一方に於ては飲水の他の供給方法を見出さねばならぬ必要を生じた。各府縣の市街地で、今以て騒いで居る公設水道の問題は、つまりこの歴史の反影である。

それ故に早く大きくなつた東京の如きは、早くからこの問題を經驗して居る。最初の江

戸の城下に出来た小都會は、恐らくは神田明神の丘の清水とか、山王権現の御手洗の水の末などを掬むだけで足りたのであらう。

それが火しからずして五里と七里の遠方から、大土木を起して水道を引かねばならぬやうになつたのは、要するに創設者の豫期以上に人口が殖えたからである。

最近の例として自分の知つて居るのは相州の會屋即ち今の秦野町の用水問題である。この邊は特色ある地形で、地下水の多い處である。會屋権現の御手洗の水は非常に豊富なものであつたから社から東の方へかけてその流れに沿うて、一線の大きな町が出来て居た。

しかも氏子にしてこの水を用ゐぬ者は、神の意に反すといふ信仰があつて、人の數が水量に較べて餘程多くなり過ぎた後迄も、辛棒してこの水を飲んで居たものらしい。

當時の人心を察するに最も適切なる史料は、今から百年ばかり前に下流に住む人々が辛棒し兼ねて往々にして鑿り井戸を試みた頃に、ちようど激しい疫病がはやつた。それを氏子共は明神の御手洗の水を飲まぬ者が出来たから、この禍が現はれたと稱して、嚴重なる

謝罪の祭をして居る。

此土地などは丘の傾斜が急に過ぎるので、無用に流れ去る水が多かつたのであることを、近年になつて好く理解した人が出て来て、ごく簡単な設備を以て瀦水池を、明神の社の横手にこしらへて、清水の分配を調節した所が、その結果は甚だ良好で、僅な經費で盛んに増加し行く人口を支へることが出来た。

併しこれもやはり或時代迄を支へるに過ぎぬことであらうと思ふ。

是迄の人が町村の發達を計畫する上に、飲水の問題を輕視して居つたことはよくなかつた。流れ川もしくは露頭の泉にたよつた時代は勿論のこと、穿り井戸の技術が如何に進んだからといつても、用ゐる地下水の分量次第である。

その水量が許さぬ程度に迄、人口を殖さうとしたのは無謀であつた。町が既に大きくなつてしまへば、假令莫大な金錢を費しても遠方から水を引いて來るの外は無いが、さういふ骨折をさせねばならぬ時まで、吾々は豫め考ふべき問題を考へなかつたのである。

鑿り井戸の技術の發達普及は、横縦共に鑛山業の進歩と、著しい関係があるやうに思ふ。吾々の生活の最も重要な條件は、久しい年月の間無名の技術者ばかりが考へてくれて居たのである。

最近又著しく鑿井の技術が進歩したやうである。しかし土地の値が上つて、よほど其利用を巧みにせねばならぬ今日では、長距離の水道は追々と不可能になつて行くことと思ふ。

従つて是迄横に遠く手を伸して居つたものを、今後、底へ深く探り求めねばならぬこととなるであらう。これが田尻博士などの地下水論の論旨であつたやうに私は思ふ。これもこれも結局する處では共同生活費の問題になるのである。

旅行の話

その二

——昭和二十二年——

手帖といふ冊子が出ると聞いて、しきりに旅の話がして見たくなつた。自分の舊友で最もよくあつて居るのは、京都と馴染の深い故川口孫治郎君である。この人の手帖とも言へない半紙本に、毛筆で達者に書いた日記が百數十巻もあつて、どんなに疲れた晩でも床に就く前に、必ず一時間は其日の見聞を書かずには寝ないといふ流義であつた。是が久留米の空襲で焚けたのではないかと案じて居るのだが、それはく詳しい又正確な記録で、鳥の話ばかりを此中から抜き出したものが日本鳥類生態資料、是だけでも菊版五六百頁の大冊であつた。まだ其外にも獸の生活や獵人の話等、一度は自分も見ても置かなくてはと

思つて居たものが色々ある。是などはたしかに始めから、後の讀者を豫期した日記であつた。之に比べると、私の手帖なんかは物の數でない。旅行の部分が少しこまかいといふ位で、書いてあるのは宿屋の名、用も無い里數や時刻などで、たま／＼話に來てくれた人の名を列記してあつても、話題さへ屢々附け落して居る。あとで記憶を書き入れる氣で居ても、旅行後は用が溜つて居て特別に忙しいので、つい其まゝに取出さずじまふことが多く、年をとつて閑が出来た頃には、もう忘れきつたことばかりである。二年前の空襲警報のさなかに、片づけ物をしようとして私は之を引張り出し、あんまりつまらぬので歎息しつゝ、大半は片づけてしまつた。さうして是でもう旅をしなかつたのと同じになつた、といふやうな寂しい思ひをしたことであつた。

しかし残つて居たにしても、實はさう大したことはない。誰か目を留めて是は何だらうかと、いふやうな場合がすでにごく稀で、家ではたゞ少しばかり、消えるのにひまが掛

るといふだけである。家から外へ散らばつて行く機會も、近年は段々多くなるらしく、東京の古書展などにも、時折は見かけるやうになつたが、そればかりはあまり熱心な蒐集家も無い。大抵は字が拙なく本がよこれ、おまけに著者が無名なので、何としても襲藏に適しないからである。以前私が或雑誌に紹介した一青年の紀行なども、表紙に村の名と姓名が有るので、後にこの家の人だといふことまでは判つたが、家とも村とも關係の無い旅の手帖であり、反故にして出した位だから、もう再び之を郷土の史料に、使つて見ようといふ者も無かつた。村に靜かに一生を終つた人々が、死ぬまでのうちに一べんか二度、よほどの因縁が熟して思ひ立つた旅なのだから、當の本人にとつての大事件であるは勿論、それを數多く積み貯へ且つ綜合し調和したものが、やがては今日の文化を構成して居るわけであるが、記録として集めて置かうといふことは企てた人も無く、又もう其時期も過ぎて居るのである。

或は單純なる個々の讀み物として、紙や活字がもう少し自由になつてから、斯ういふものを出来るだけ數多く、並べ列ねて出して置かうといふ時代が來るのかとも思ふが、保存が果して間に合ふかどうか心もと無く、其上に古い手跡の讀めなくなることは、我々昔者が驚くほどの速度である。是では僅かに残つて居る部分までが、すつかり蟲に閉ぢられて開かなくなるにきまつて居る。時節を待つといふやうなことは言つて居られない。それ故に今からでも旅行の話をはやらせて、さういふ機運を促進する必要があるかと思ふ。私なんかの手帖は貧弱なもので、假に保存してあつても役には立ちさうも無いが、それでも今になつて回顧して見ると、ちようど自分たちの壯年の頃が、我邦の旅行道の最盛期であつて、それが漸次に衰頹したことを、まのあたりに見聞して來て居るのみで無く、遠い昔の世の行脚の人たちの、難行苦業が積り重なつて、終にこの様な花咲く春にめぐり逢つたのだといふことも、まだ我々だけは意識して居るのである。是が將來果して今一度、再び日本人の若い日を樂しませるだらうか、はた又永遠にそれは過去の悦びとなつてしまふか。

國の歩みの是が大切な岐れ路であつて、うつかり豫言じみたことも言はれないけれど、大體に兵役といふものが全く無くなつて、若い人々はそれだけ時間が多くなつて居る。學校や講演書籍以外に、身の爲世の爲に費し得る力がまだよほど彼等には有るものと見ることが出来る。少くとも一部はこの方面に向つてそれが利用せられることにならうかと私は樂觀して居る。さういふ傾向がもし幸ひに現はれて來るものならば、黙つてたゞ見て居ることとは何分にも義理が悪いのである。

衰微といつては或は承知をせぬ人もあらうが、ともかくも旅行道は近年になつて變化し、以前あつたものゝ幾つかは無くなつて居る。最も著しい一つは路筋の選び方の狭くなつたこと、或は旅の目的の固定と謂つてもよからうか。家を出る時から行く先がちゃんと定まり、その用事がすめば直ぐに家路に向ひ、路はめつたに迂回せず、途中に有る物には一向に目をくれない。是は固より交通の便利になつた爲で、旅を手輕に何度でも思ひ立たれ

るものにした代りに、以前は多忙といつて旅をしなかつた者が、今ではどしどしこの仲間に入つて来て、ひたすら行く先だけを問題にするやうになつてしまつたのである。

旅といふものゝ本質は、いつの間にか一變して居る。閑だからよく旅をする、などいふことが考へられなくなつた。

ぼけあざみ旅して見たく野はなりぬ 山店

斯ういふ旅人と折々出逢つたのも、私等の頃までのことであつた。諸國の往還は今もちやんと有るが、それを使ふのは近村の者だけで、茶屋も旅籠屋も無く、峠路は芒である。汽車が有る限り、大まはりしても、それに乗つて行かぬとみんなから不審をかけられる。つまりは旅とあるくといふことゝが、丸つきり別々の仕事になつて居るのである。

古來の路筋は榮枯盛衰した。中でも僅かなものだけが途法もなく重要になり、其他は土地の者にまで由緒がわからなくなつて來た。東京などで發見せられる近世の道中記は、幾

つあつても大抵は東海道五十三次、稀には金比羅宮島錦帯橋まで足を伸ばし、歸りは中仙道をやゝ草臥れて戻つて來るといふ、型にはまつたものばかりであつて、是を百ほども集めて重ね合せて見たら、何か思ひかけない事實が見付かるのかも知れぬが、そんな暇人はもう是からは出さうも無い。それよりも困つたことは雲助でも出女でも、大よそ旅と名のつくものゝ知識は、全部がこの方面だけの経験によつて居るので、程なく單調にも平凡にもなつてしまひ、汽車が出來ればもう之を省みる者は無いのである。日本は旅行の殊に盛んな國だつたと思はれるのだが、その影響の跡づけ得られるものが、斯んなに乏しいのもちよつと異數である。しかも文化の隠れたる交流を想像しないと、説明の出來ない現象は、今でも無數に心付かれるのである。

をかしい言ひ方だが、私は斯う考へて居る。一つも手帖を附けなかつた幾十萬の旅人の、過去千年の間に爲し遂げた事業も、結局は今僅かに残つて居る小數者の紀行から、こゝを道の口として追々に尋ねて行かれる。無論その以外にも方法はあり、たとへば古道の今あ

る形態、之に關する土地人の記憶、又一方にはそこを通つて、入つて來たらうと思はるゝものゝ比較、たとへば方言とか流行唄とか昔話とか、乃至は稻荷や鍬神といふやうな信仰の一致などから、逆にそれを運んだ人々の面ざしを、考へて見ることも出来るだらうが、さういふ興味をかき立てる爲にも、やはり先づ旅といふものゝ大いに變遷し、かつては今よりも遙かに充實した、効果の永き世に遺るものであつたことを、心付かせる必要はあつたのである。

たゞ残念な話は、私が斯ういふ考へを持ち出したのは、少しばかり時が遅かつた。以前も紀行文集を編纂して見たり、五萬分の一の測量部地圖を左に置いて、色鉛筆で線を引きつゝ、興味深く讀んだものも幾つかあるのだが、まだ其時には自分たちが口を出さなければ、旅がこんなにも棄てばかしたに、忘れられて行くものとまでは思はなかつた。今から始めてももう纏まる見込は無いが、それでもこの事が可かり樂しみの多い、行く／＼新らしい物

の見方を、引出す糸口としては役に立つといふことを、説き立てる位はやつて置きたい。さうしてあはよくばもう一度、明治時代のやうな活氣に充ちた若い旅人の、全國を跋渉する世の中を再現させたいのである。

紀行の今までに公表せられて居るものは、大部分は詩歌俳諧の保存を主とした、記述の分子の少ないものばかりで、あの川口君の鳥類觀察の旅の記の如きものは、以前は殊に稀であつた。他の多くは最初から家に留め、子孫の閲讀をさへ豫期しなかつたものなのだから、捜さなければ見付からぬのは當り前の話である。それでも大切に保管しようといふ者の有るうちはよかつたが、今度はどうやらそれも慥しくなつた。何か第二の手段を講じなければならぬ機會である。戦中に私は山科言繼卿の日記を讀んで居て、あの中に幾つもの得がたい旅の記事のあるのを見て感動した。その一つは岐阜へ信長に逢ひに行つた有名なものだが、なほその以外にも若い頃に、陸路近江の千種だか八風だかの峠を越えて、清須へ遊びに行つた往復の道の記と、年をとつて後駿府の今川家へ、叔母さんを訪ねて世話に

なりに行つた際の日記などが、平凡な常の京都の記録の中に、挿まつて光を放つて居る。さうしてもう此時代の村里の生活を描いた文献などは、捜しても他にはさう得られさうも無いのである。一つ二つではたゞ珍奇といふに過ぎぬだらうが、もしも斯ういふ風な人と家、旅の前後の世相といふものを取添へて、しかも同じ方面同じ路線の、五十年百年を隔てた姿を、たとへあらくとも書き残したものが集まつて來ると、新たに考へられることが必ず多いことと思ふ。最近に私が京都の諸君に勧めて、諸國の舊家などに持傳へた先代の日記を、次々に整理して出してもらうとして居るのも、一つには又その平和單調の記録の間から、いはゆる生涯の思ひ出であつたらうと思ふ時々の印象を、特に際立たせて味はつて見たいからであつた。寂寞たる常の日の沈滞に裏附けられて、事件が我々の心意に及ぼす効果の大きかつたことは、都市の現代にはもう想像し難くなつて居る。祭や人間の離合集散の如き、他にもくさくさの機會はあつたけれども、さういふ中でも旅は殊に其昂奮の跡をわかりやすくして居る。言はゞ野中の鮮かなる「ぼけあざみ」の花であつた。

○
隱岐の焼火山の歴代祠官、松浦氏といふ舊家に持傳へた二つの手帖を、近頃測らすも見せてもらつて、改めて自分の小さな旅が、如何なる因縁を百年後の日本と、結び得るであらうかを考へる機會にぶつかつた。この昔の二人の旅人は、何れも世に聽えた貴とい驗者ではあつたが、この日記のみは何としても讀み物では無い。是が子孫の手に大切に管理せられ、しかも國內の相互交通が、もう一度考へなほされねばならぬ時世になつて、現はれ出たといふことは偶然の幸福である。何よりもなつかしいと思ふのはこの二つの手帖が、島に住む人の旅であつただけに、共に私などの通つて見ようとも企てなかつた路筋をとつて居ること、一方の覺心といふ人の日記は、善光寺を経て江戸へ出て行くのに、便船を見つけて先づ佐渡島に渡り、そこで十數日の風待ちをして後に、新潟から上陸して海岸傳ひの路をあるいて居る。稀なる順風で、能登の輪島に一夜の船繋りをしたばかりで、四日目にはもう佐渡の太田の湊に著いたとある。焼火山は船方の尊信する神であつた故に、船頭

甚六が家では勿論心の限りの款待を受け、處々の島内の靈場にも巡詣して居る。ちようど桃櫻の到る處に咲き出した、舊曆二月の末方のことであつた。

それから他の一方の快榮といふ人の旅は、伊勢参りが主であつて、還りには奈良と京都とを見物して居る。京と伊勢との間は大體に普通の途らしいが、其他の往復には自分などの考へても見なかつた路筋を通つて居る。地名は一つ一つ竝べて見るのもせんが無いが、まづ美保ノ關に上陸して次の日は安來泊り、それから赤松越をして大山に詣で、今の因備線の根雨に下つて居る。それから三鴨勝山坪井等、すつと作州を横に切つて播州の三ヶ月から姫路に出るまで、途中滞在もあつて其間に八日を費して居る。何か縁故があつて此路を擇んだのかも知れぬが、ともかくも途中には宿屋があり中食の茶屋もあつて、是も堂々たる街道であつた。歸路の丹波街道は私がまだ通つたことのないだけで、是は京都の人にはなじみの深いものであつたらう。日程は須知・福知山・河守・宮津、それから橋立見物をして翌日は久美濱泊り、城崎温泉に四日の湯治の後、その近くのキリハマといふ地から

舟を雇ひ、モロイツといふ處に上陸したとあるが、この二つの地名は私には始めてである。諸磯は因幡の賀露あたりのことではないか、とにかくに爰で隠岐への便船を待つて居て、乗船して三日目に、隠岐島後の西郷に歸着した事になつて居る。

さつと先づ是だけの事がわかるのだから、相應に綿密な日記かといふとそれは大ちがひである。外に書いてあるのは宿屋の名と著發の時刻、宿料買物代ぐらゐのもので、それも矢立の墨のかすれ書きで、單なる小遣帳の筆ついでのやうなものだが、子孫後裔はもとよりのこと、我々にとつても是だけのものが、有ると無いとでは大きなちがひである。言葉の外のものを味はふと否とは、見る人によつてさまざまでもあらうが、たつた是ばかりの文字の面からでも、たとへば近畿一帶の宿屋は皆木賃で、毎月白米を買ふその代金が、土地毎に大分ちがつて居ることゝか、又は京で調へる買物の種類とか、それを配分するそれゝの心遣ひとか、時代の片端に觸れたものが色々ある。一つや二つの例ではたゞの珍奇

に留まるだらうが、もしも誰かの心がけによつて、斯ういふ種類の記録が國の隅々、多くの時處に亘つて集まつて来るやうになれば、我々の興味は雪ころばしであらうと思ふ。

宿屋といふ問題についても心付いたことはあるのだが、段々長くなつたから此あたりで一旦切上げる。最初の計畫は足ごしらへといふことの變遷を、自分などの經驗によつて話して見ようといふのであつたが、それも亦いつか詳しく語ることにして今は略して置かう。のんきに自由に話を進めようとする、書くことまでが漫遊式になつていけない。紙の大切なけふ此頃、果して斯ういふものでも記事にしてよいのかどうか。編輯子の取捨に御任せ申すより他は無し。

索引

赤鱗 あかお
 アガリ
 秋蠶
 麻布
 アスナラウ
 アスヒ
 壓搾機
 穴のあいた小石

ア

索引

二九	アブリ	一五九
二九	油桐	110, 115, 101
二六	海士町	103
九	網の染料	七九
一六	洗場	二七九
九	行脚僧	三三, 三三
五	暗渠	一〇八
一〇	按摩	三三
三〇		

蒲脛巾
紙漉き
龜
鴨の坂網獵
蚊帳
茅山
カラ澤
刈敷
刈分け
カルサン
ガンコ踊
韓人の末
神戸正雄博士

キ・キ

二〇九
二〇三
二〇五
二〇〇
二〇七
一九七
二〇六
二〇五
二〇二
一九九
一九七
一九三

厩舎
牛車
厩肥
寄寓者の村税
木地屋
木質
木流し
絹織物
共有山
共有地
共有林
經木眞田
共進會
共同生活費の問題
漁業調査書

二〇三
二〇三、二〇一
二〇四、二〇八
一八〇
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇四
一九七
一九四、一九三
一九五
二〇一
二〇四
二〇一

漁商人
漁民の薪
桐
杞柳
金太郎鰻
銀杏
金肥

ク・ク

區有財産
クサマキ(臭楨)
棟を留める
棟を留める棒
葛布
クツヤ

一五
二七
一〇四
一五
一五
一五
一〇八、二〇四
一三〇
五九、八九
一六
二〇五
八
一九三

屑綿
鉦神
鉦先
熊
雲助
黒モジ
桑
快榮
鑛山業の進歩
鑛毒問題
鑛夫
桑木殿翼博士
火葬場
果樹園
官有地

二二
二九
六
六三、二三
二九
三〇
一〇七
二六
二八四
三九
二〇四、二〇五、二〇
二八
一〇一
一三
一〇五

官行伐木

ケ・ゲ

鶏糞

鶏卵

下駄

下駄の齒

夾竹桃

毛桃

玄武岩

コ・ゴ

洪水

公設水道

購買組合

三三

虹梁

肥曳き

國有林

虚空藏

コクソ

御供田

國內移動

國分寺

小作組合

小作人

小作料

腰掛石

乞食

乞食名

五十町一里

三三

六

九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

サ・ザ

三三

サイタ

裁縫職人

材木商

造村の伎倆

造林事業

桑園

境に塚を築く

坂元

鑿井の術

下戻法

サコシ

サコンタラウ

ササメ

さくら

三三

三二

三一

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

蠶種

小遣帳

五徳(鉄輪)

粉糠

五分サイタ

古墳

小村

子安地藏

御料林

コロ

コロ木

コロモガヤ

混合した人種

ゴンボダネ

田植 田植祭
 タエテといふ副詞
 高桑作り
 高清水
 高窓
 瀧神
 薪の市價
 薪山
 薪を流す風習
 焼火山
 栲衾
 武田耕雲齋
 「但馬考」
 田島錦治博士

三六 田植
 一五九 田植祭
 三〇 高桑作り
 二七四 高清水
 七二 高窓
 一八九 瀧神
 二七〇 薪の市價
 二七五 薪山
 二五九 薪を流す風習
 二九五 焼火山
 二四九 栲衾
 二二二 武田耕雲齋
 二〇、二六三 「但馬考」
 三三 田島錦治博士

一九三 タダコエ
 二〇五、二六三 壘
 一九〇 ダナ
 二五 堅井戸
 二六 棚田
 二四 谷入
 二四 足袋
 二七 旅商人
 二七 旅の手帳
 二五 鯛引網
 二五 田舟
 二四 夕モ
 二二 鱒釣り
 二〇、二六三 ダラニスケ
 三三 鱒のカギ

樽丸
 垂れ蓆
 「檀嶋」
 段木(ダン木)
 子

地價
 地下水
 地下水の出沒
 地下水の露頭
 地下水論
 地形語
 地上權
 地租改正
 窒素石灰

八九 地主小作關係
 七一 地引網
 一七 町家
 二四、三三 帳紙
 一四 長者屋敷
 一四 帳面紙
 一四 茶島
 二八三 中齒の足駄
 二七〇 中門口
 二六九 楮の黒皮
 二八四 瀧水池
 二五 地理上の條件
 一四 堆朱
 一四 窒素石灰

二五 地主小作關係
 三三 地引網
 二八 町家
 二〇、二〇八 帳紙
 一八 長者屋敷
 一四 帳面紙
 一四 茶島
 二八三 中齒の足駄
 二七〇 中門口
 二六九 楮の黒皮
 二八四 瀧水池
 二五 地理上の條件
 一四 堆朱
 一四 窒素石灰

通婚
ツギ八草鞋
ツツガ
栗花落(ツユリ)
鶴
「敦賀名所記」

テ・テ

朝鮮の古鐘
出稼ぎ
出作り
テテ
手間
出村
出女

二〇〇 天狗
三三三 テンゴ
二七〇 テンバ
一六七 テンボ

ト・ド

一三三 砥石
一三五 東海道五十三次
一八二 土方の親分
一八二 土器石器
一八二 特殊部落
一八二 特賣法
一八二 年不取川
一九二 戸田海市博士

一五九、一七〇
一八七
一八七
一八六
一八六

ナ

鳶口
飛地
遠干潟
下口虫
内陣
内藤湖南博士
仲仕
流木
薙畑
夏着
繩
繩手路
ナベザ

二二 生駄
二〇二 生の食物
二五五 ナル

ニ

二二八 苦水(ニガミツ)
二二八 逃水
二〇三 ニヅエンボ
一〇三 二宮徳氏
八七、二七〇 荷馬車曳き
空、突、奄、充 新村出博士
一突 鳩鳥
二七〇 二毛作
二七〇 荷持ちの人足
三二 女僧

二六九
二六九
二六九
一七五
二〇〇
二一八
二一〇
一四、七、六
二三四
八

ヌタ

ネ

根小屋

鼠甲斐絹

ネソ

ネヅコ

ネム(合歡)

燃料

燃料の問題

ノアヒ

五

二八〇

三三九

三三〇

五九、八四、八五

一〇〇、一〇八、一一八

二五〇、二五五、二五九

二四八、二六三

二二五

農學校

農具

能藝

「農業家訓」

農事講習

「農人囊」

野方(ノガタ)の在所

野宿

野中の清水

飲水の問題

ハ・バ・バ

俳諧法師

方言

紡績

二、四

三、五〇

三、四

一九九

三、八〇

一九九

三、八〇

三、四

三、三

四

二、四、二、五

二、〇

「防長風土記」

報徳道

麥稈眞田

麥食

博努

ハケ(崖)

ハゲシバリ

宮清水

はさ木

橋場

橋本の里

櫛

ハセ木

島の地價

島地小作料

二四六

二

二六三

一〇

三〇

二七三

八六、一五二

二七四

七四、三五六

二七五

二七五

二三五

一〇

「八幡搜來記」

ハツタ

バツタン

ハデ

花菖蒲

ハバ

灰市

灰屋(灰小屋)

羽二重

玫瑰

蔓荊

流行唄

ハラキ

春蠶

パルプ

三三

五

二四

二五

二六

一七

二六〇

二六〇、二六四

二二

六、二七、三二、一四九

二八

二九

一四

一六

番太
ハンの木
伴信友

ヒ・ビ

稗
稗の飯
日限市
瓢網
瓢のヒサク
「斐太后風土記」
火棚
一カマ
一筋町
姫小松

一六
三三、三六
二九

毛、六
二二
二七
七九
二二
一八
二二
二七
二八
八

枇杷
「備陽記」
日備
日備とり
日和山
平場
平場の開墾
肥料
ビンダラヒ
貧農の食物

フ・フ

路
フケ
フケ田

一四〇、一四九
二四
二六、二八
二四
二〇
二四
二五
二八
二九、二〇、二九、二六、二〇、二〇
一〇
三

一三〇
二〇
二九、二五

藤菱

藤井紫影博士
婦人の努力
豚

物産館
物産陣列場
部落有林
ブリウチ
古道具屋
風呂
風呂の水
分教場
分家制度

ハ・ハ

三〇

二八
二六
一五
一四
二四
二五、二七
二七
二五
二六
七

米穀検査員

ホ・ホ・ホ

保安林
封建時代の慣性
保管轉換
楢
墓地
ボツカ
ホヤ(寄生木)
ホラ
掘兼の井
鑿り井戸
ポルドー液
ボン

八

二八、二〇、二四、二四、二四
三〇
八九、九二
二五
二八
六、六、二六、二〇
五九、一八五
五九
二六九
二七、二八、二八、二八
二五
二五
三一九

本郷
ボンス
ボンスケ

二四
二五
二五

御影石

御手洗

御手洗の水

水無澤

水の神

水番小屋

三水極

水無瀬川

「美濃志」

明恵上人

盲人
抹草山
町の起原
町の歴史
松浦氏
末子相續
松炭
マツテクレ
マナゴ
蘭商人

一六
一七
一七
一八
一九
二〇
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二五
二六
二六
二七
二七
二八
二八
二九
二九
三〇
三〇
三一
三一
三二
三二
三三
三三
三四
三四
三五
三五
三六
三六
三七
三七
三八
三八
三九
三九
四〇
四〇
四一
四一
四二
四二
四三
四三
四四
四四
四五
四五
四六
四六
四七
四七
四八
四八
四九
四九
五〇
五〇
五一
五一
五二
五二
五三
五三
五四
五四
五五
五五
五六
五六
五七
五七
五八
五八
五九
五九
六〇
六〇
六一
六一
六二
六二
六三
六三
六四
六四
六五
六五
六六
六六
六七
六七
六八
六八
六九
六九
七〇
七〇
七一
七一
七二
七二
七三
七三
七四
七四
七五
七五
七六
七六
七七
七七
七八
七八
七九
七九
八〇
八〇
八一
八一
八二
八二
八三
八三
八四
八四
八五
八五
八六
八六
八七
八七
八八
八八
八九
八九
九〇
九〇
九一
九一
九二
九二
九三
九三
九四
九四
九五
九五
九六
九六
九七
九七
九八
九八
九九
九九
一〇〇
一〇〇

昔話

ム

八三、一五

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

麥

村鏡(ムラカミ)

村の大きさ

村の形

村の種類

村の生活條件

村の成立ち

村持

村持の山

村山

三〇、七、四、六

二八

二九

三〇、三二

三一

三二

三三

三四

三五

モ

木材の需要

模範工場

粗穀

粗穀の産

モミチ

木綿

股引

ヤ

養魚

養蠶

洋服を着た人

焼き印

三六

三七

三三、三六

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

三〇八、三〇九

三〇

三一

三二

ロ

六地藏

六部

轆轤細工

ロバートソン・スコット

ワ

黄連わうれん

「稚狹考」

「若狹國志」

輪島

わせ粟

渡し場

蕨

蕨細工

蕨製品

蕨苞

蕨灰

蕨の根

蕨のほどろ

蕨巻鱒

蕨屋

蕨屋根

割木

椀木地

キ

井カハ

蘭作

三〇〇

二〇、二一

二四、二五

二六、二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

二〇五、二〇九、二一五

二七五

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

四六

三七

二七

エ

井戸

井ドバ

井神様

蘭席

越後縮

越後の七不思議

越前奉書

ヲ

小川琢治博士

桶結職

長百姓ちやうひやくせい

ヲダアシ

三〇

三〇

三〇

三〇

三七

三六

三六

三三

三三

三三

三三

小千谷縮

ヲバコ節

女の出稼ぎ

女の勞銀

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

刊行の言葉

こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有様であつた。加ふるに民俗探訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精涉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けにせんとす。幸ひに先生にはこの計畫を賛せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に取扱はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として残されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活口承文藝、國語問題などいづれもその豊富なる資料を全國に互る比較研究の下に來たし、ことさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て満足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。(昭和二十三年三月 柳田國男先生著作集刊行會)

柳田國男先生著作集 第六册

北國紀行

昭和二十三年十一月二十日發行

定價 二百三十圓

著者 柳田國男

發行者 梅山 糺

發行所 實業之日本社

東京都中央区銀座西一ノ三
 電話 東京橋五一二一—五
 振替 東京 三二六番

印刷所 大日本印刷株式會社

表紙 小倉印刷所

製本所 小原製本所

配給元 日本出版配給株式會社

IN-66

柳田國男先生著作集

第一冊	山の人生	初版五十圓
第二冊	地名の研究	再版百二十圓
第三冊	信州隨筆	初版百圓(品切)
第四冊	時代卜農政	初版百二十圓
第五冊	木思石語	初版百八十圓
第六冊	北國紀行	初版二百三十圓
第七冊	女性と民間傳承	近刊
第八冊	退讀書歷	
第九冊	續退讀書歷	
以下續刊		





